

史談

…八年九月五日發兌

第九十六號

東京國史社

女鑑第九拾三號目録

女鑑

夏の日の心むきて……一

論說

女流の弊……馬醉木舍……五
女子教育一斑(二)
女子教育の大本……三輪田眞佐子……八

史談

幸田彦右衛門の母……鹽井ふく子……一四
烈婦のこと……永石薫風……一八

家政

いけ花……田邊和氣子……二〇
たちぬひ(裁縫の道)……西山たい子……二一
だいごころ(鮎ず)……美食散人……二四
九月中婦人行事……くりや女……二八

學園

わが學園(二)……鹽井正男……三二

漫錄

好こそ物の上手故人小山田與淸……四〇
貝原益軒妣へのさし狀……四〇
大石内藏助の内室石子の文……四三
織田信長公の書簡……日下寬……四四
毋其子を拜す……馬醉木舍……四五
伊達模樣……仝……四五

文林

七草花……二十二木生……四六
九十九髮(一)……人町桂月……四八
可憐孃(三)下……中尾黨夢……五二

歌

仝……近衛忠熙……五五
仝……德大寺實則……五五
仝……高崎正風……五五
仝……津輕承昭……五五
仝……嵯峨實愛……五五
仝……久我建通……五五
仝……諏訪忠元……五五
仝……前田利嗣……五五
仝……佐々木高行……五五
仝……小出粲……五五
仝……植松有經……五五
仝……宮地嚴夫……五六
仝……宇野豊道……五六
仝……曲澤貞恒……五六
仝……草野隆道……五六
仝……永石德文……五六
仝……島津輯子……五六
仝……保科節子……五六
仝……小笠原艶子……五六
仝……伊達泰子……五六
仝……原田若生子……五六
仝……三宅龍子……五六
仝……諏訪晴子……五七
仝……田邊和氣子……五七
仝……海上壽子……五七
仝……彦坂尊子……五七
仝……安東菊子……五七
仝……内田遊獸子……五七
仝……太田貞子……五七
仝……市川柳子……五七
仝……曲澤梨香子……五七
仝……高井孟子……五七

文

水邊に暑を避く……林甕臣……五八
蟲の說……鹽井ふく子……五八
百花園の七草……永石德文……六〇

雜錄

皇后陛下御令旨……六三
皇太子殿下の御不例……六三
高輪御殿御見舞……六三
皇太子殿下御平癒御祈禱……六三
早田中隊長敵旗を神廟に奉る……六三
基隆土民嘉不を神廟に捧く……六三
大阪高等女學校規則改正……六四
渋り易きことば……六四
下田歌子女史……六五
なすらへ歌……六六
子守學校……六六
開く勿れ見る勿れ……六六
女子の高等教育主張者に申す……六七
榊博士を煩はさん……六七
女教師の渡韓……六八
日本留學の朝鮮婦人……六八
臺灣の日本語學校……六八
寄書……六九
新女學士二人……七〇
あさましき文明……七〇
笑ひぐさ……七二
うらうへ……七二

教の庭

歌 百數十首
文 數章
鍋島侯爵夫人榮筆丹さく形……七三

附錄

流行の栞
修身百首(つゞき)

口繪……永峯秀湖
插畫……高橋松亭

幸田彦右衛門の母



女鑑 第九十三號

夏の日の心おきて

わが身ひとつの夏にあらねば、老いたるわかき、誰かはあつからざらん、誰かはくるしからざらん。あつしとさけび、くるしとうめきたりとも、そのあつさの、きえうせぬべきにはあらず。心をしづかにすゑ、身をやすらかにおきたらんこそ、なか〱に涼しさは覺えつべけれ。男はさらなり、まして女の身の肌もあらはに、居がまへをくづし、あるはしどけなく晝寢したるなど、見にくからぬかは、かゝる折にこそ人の心の奥はみゆれ。

或人の信濃路へ旅しけるがかへり來て、語りけらく、都にすみて、つねにそま

き物にあき、せみのはのうすものを着ながら、なほことの足りがてにすめる人人に見せまほしきは、かの國のさまなり。わかやかなる女などの、てりはたゞけるに、たゞ小笠ひとついたゞきて、汗あへつゝ畑中に立ちて、手足は更なり面まで、ちりほこりにまみれて、立はたらきつゝ家の業をたすくるさま、けなげにも、はた、あはれなり。とぞ物語りける、信濃路のみにはあらず。天さかる鄙のさまは、大かたみなかゝらざるはなし。世の事わざはくさ／＼にことなれゝは、たれもみなかゝれかしとゝは、あらざれども、かへりみて、わが身につみなば、いかゞかは覺えん。

夏の日はものみな、あざれやすく、はたあしき病のはやるをりなれば、あさよひの飲みくひのもの、などことゝ心を用ゐたるべく、はた衣服調度をはじめて、

住居のほとりまで潔くきよめたるべし。されど流れなば、奢におちいりぬべし。心してよ。衣服など品柄はことなくて、あかつきあせじみたらんは、粗けれどもあらひすゝぎてきよらかならんには如かじ。三日四日さきに着たりつる衣のまだたゝみもせで、あたりにかけつらねたるなどは、心おきてのほども、見にすきてあさまし。老いにたる親、わかき弟妹さてはちでなどもちたらんきは、わきて、くひもの着物萬に、ことさらに心してとゝのへすましたるべし。わかき處女などの、身かよわくて、醫師などのすゝめたるはしらず。さらぬ人のたゞ心やりにとて、海水浴などにものすめるは、いかゞあらん。かゝるところには、折々よからぬ風のふきすさぶめればなり。よし、たゞに身體すぐよかになりなんも、あらぬ病のおぼえず心にしみわたりたらんに何かはせん。まし

てあらき濱邊に、あらぬさまにしほたれたる、心ゆくわざかは、さにはあらでも、世に女たるに相應しき、心やりの道のすくなからぬをや。

我がくには、神代のむかしより、病をわづらへば、いでゆをこそ浴みたりつれ。そも潮をあむなるはいと近き世のわざなりけり。このしるしあらんことは、今更に論ふべくもあらざめれど、かよわき身の、とみにいとすくよかになりなんとも覺らず。されば夏の間のしばしがほどものせんよりは、なかなかにつねに朝夕の食物さては運動の身にかなひたらんやう、心したらんこそまさりたらめ。つとめて起き出で〻、内外のあさぎよめなど、はたなにくれに立はたらきたらんこそは、身のために且つは家のと〻のへのうへにも、ふたつながら並び整はりて、こよなきわざなるべけれ。

論說

女流の弊

馬醉木舍

婦人の德は、男子よりもとりわきて、美を重んずるものから、言葉つかひ擧止すべて、おだやかに、心根の堅くしまりて、行正しきを最上とするは、今更の品さだめにあらず。しかしながら、此の美は、換言すれば、文質彬々と云ふことにて、眉目の美しきをいふにあらず、さてかゝる美德ある婦人は、世に高等なる教育あり、知識あるものよりは、寧教育も知識も、二の町なる婦人に求めて多きが如きは、いと思はずなりけり。蓋人の知識は、高まるに從ひ、操行いよ〳〵高尚にいたるべきを、或性によりては、なか〳〵に道理を壓する力となりて、遂に自其の美を損ひ、德をくづす基となるか、湯淺常山翁が文會雜話の

記事にも、武人は片口なれど、行律義なり。文人はよく論辨すれど、行正しきは稀なり。故に文人不行とは云ふなりとあり。斯の如く一得あれば、一失ある時弊の常として、已むを得ざれど、これをしも婦人の一得一失としては、頗につかしからず。然るに高等なる學識あり、其の名世に聞ゑたる婦人にして、其の例多きは、いと口惜しからずや。よしこれ書も讀まず、敎もうけぬ婦人の物知らず、過すならば、筆の端にもかくまじけれど、書も讀み、文も書き、或は書もあらはし、人の師となるものの多かり、筆とる身の務とて、豈一言誡れかでやは。今都下にて某女子など、敬稱を加へらるゝ婦人につきて試みよ、其の同じ名ある間に於きて、相互によく交ることを得るものゝ稀なるは、最著しき事實なり。其の心の何ぞかく信ならざるか、甚しきはおもむろに、相誹り相譏し

て、憚らざるものあり。又或女史の如きは、最德行あるを以て自負す。其の人譎言多し、ゐば〳〵人の子をあやまてり。かゝる淺はかなること、聊婦人に天賦の性あるも、極めたる弱點なれば、女史たる識あるもの、何ぞ自誡めて矯正せざる。又他の操行に於いても、女史たるもの、稍世の誹草を生ずる多し、これ一は男子よりも、女子ゟ一段貞操の重きを擔はしむるものから、事ゟ敏なるもの知らず、招くこと少からざるか、一は女傑は恣なる性あり、かの唐の則天武后の如し、其の類史籍ゟ徵して鑑とすべきもの少からず。女史たるもの、深く自戒愼せざれば、弊を流すこと甚しからん、近世高等なる學科を修め、數年螢雪の勞をつみ、出ては人の子の範となり、嫁しては良妻となり、賢母となるべき知識ある婦人にして、其の身伊勢物語ゟあるが如き事を傳ふる、果して幾

何ぞや、これ等の弊まいたりては、大に由る所を異にし、先輩女史の罪まあらずといへども、知識ある婦人操行まとぼしきを傳へ、後進女子の父兄を驚かし、女子教育を沮喪せることの兩三年の間に於いて、最顯著なり。これ二者の罪にあらずして、亦誰をかとがめん。論じ來れば、柳の五衣きたる宮女のあてやかなりしを、下の裳ばかりまて、人に遇はする心地して、いとゞ忍び難き感あれど、後進女子のかへりみ草となり、且は時弊をたむべしと、輕重をかけてかくなん。

女子教育一班（二）

三輪田眞佐子

女子教育の大本

女子、何をもて教へざるべからざるか。果して、教ふべきものなりとせば、其の大本如何。おのれ今より、其の次第を、本篇にものせんと思ふ。そも〳〵女子教育は、女子のおのづからなる、一切の能力を培養して、眞の幸福なる生活をなさしめんために、外ならずかし。されど、こは定義にあらざれば、固より疑義あることを免れず。由りて、左にこれを敷衍せん。

第一　女子教育はおのづからなる、一切の能力を、培養すべきなり。おのづからとは、頗る必要なることにぞある。世の中には、誤りて、教育は、人工をもて、天性を曲げ、おもふまゝなる、人物を造り得んものと、考ふるものも、あるめり。されど、天然にもとり、人爲を巧ましくせんことは、いと難し。さながら、桃樹をいかばかり、培はんも、祈らんも、其の樹に、梅花は咲かさるべし。

孟子曰く、學問の道、他なし、その放心を收むるのみと。唯學問は、天眞を全くすることを、主とするものとなし給ひけり。されば、女子教育の如きも、女子の天性なる、良知良能を養ふべきなり。從ひて、男子と、教育の趣意を異にし、學科にも、自然差列あるべきなり。ある人曰く、男も人なり。女も人なり。等しく人なれば、亦學ぶことも、等しかるべしと。こは論理に合はざるものなり。何となれば、人といふ點のみは、等しけれど、男女は人の中の、またの區別なれば、全然等しとやいふべき、恰も梅桃の等しく、樹なれど、亦區別あるが如し。

次に、一切の能力を、培養する理由は、元來教の一方にのみ傾き、ある能力はかり、發達したるときは、片翼の鳥の飛び得ざるが如く、隻輪の車の、轉じ難

きか如し、反て、無用の長物となるものなり。思ふに、男子　多く專門の業をなすべきをもて、得意の能力のみ發達すればたとひ充分ならざるとも、なほ忍び得べし。されど、女子は假りに專門の事をなさんもの　とするも人の妻たり。母たり。以て家政を主ることなどは、如何なる女子も免るべからざるを以て、女德、女智、一切の能力を、稍等しく養ふべきなり。

第二　あはれ、春の日、錦のやうなる花を見すてゝ、學の屋に急ぎ、秋の夜、玉のごとき月をも眺めで、机に向ひ、文を披く、孃たちは、果して如何なる望を遂げんため、然るか、わが父や、母や、指折り數へ、この三とせ、四とせの間、この孃を學の屋に入れなば、卒業の曙に、斯くもあるらむ、と夢現に樂みつゝ、かゝる、文をも、求てん、かゝる器をも、買はゞや、と黃金さへ惜まざ

るものは、果して、如何なる願を懐きて、然るか。これあだなる、生涯をなすことを、望まず。行く末、眞の幸福を願へばこそ。されば、現今女子の勉學する結果なかなかさかしらだちたるものとして、擯斥せられ、能く世に處すること、能はざらしむる如きは、女子教育の本意ならんや。かく言へば、因循なる説と、罵るものあらむも、西の國の百科字林といふ文にさへ、（ゼームス、ミル）となんいへる人が、「凡、各人をしてなるべくは、先つ自個のため、次ぎに他人のため幸福を得せしむること、教育の目的なれ」とものしけり。

茲に、生活といふ言葉を、ゑへし所以のものは、人は萬巻の文を讀み破りたりとて、活用せざるときは、一丁字だに知らざるものにも劣り、迚も立身することと難し。亦西洋の（スペンサー）といふ人の文に、「人は如何に生存すべきやとい

ふことを考ふるが、教育の必要なり。且つ教育の目的は、完全なる生活をなすにありとぞ」、いへる。故に女子自ら活學をなし、死學をなすべからず。總て如何なる、金言を誦するも、まだき之を實踐せざるものは、有德の女子といふべからず。如何なる卓論を吐かんも、なほ躬行せざるものは、有爲の女子といふべからず。荀子曰く、小人之學也入乎耳出乎口、口耳之間、則四寸耳、曷以美七尺軀哉。と孃たち小人な學びそ。

みどりなる
ひとつくさとぞ
はるはみし
あきはいろ〳〵の
はなにぞありける



史談

幸田彦右衛門の母

鹽井ふく子

凡そ、人の子に、かしこきもの、おろかなるもの、善きもの、惡しきものなどの、さま〴〵あるは、もと、其の天性によれるものなりとはいへ、又、其の母なる人の敎へこそ肝要の事なれ。彼れ支那の國にて、大賢人といへど、誰知らぬ人もあらぬ孟子ほどの人も、其の母なる人が、三遷の敎へ、また斷機の誡めなくば、いかでか、さばかりのやんごとなき人となれるべき。又我朝にて、臣たるもの丶鏡、子たるもの丶しをりとて、誰知らぬ人なく、めでたきものにはやさるゝ楠の正行公、若し、其の母なる人が、小腕に取りすがりての敎訓なくて、正行が手にせる、刃の心にまかしたらむには、如何なる身を以て、國の爲め、君の爲め、父の遺言をば全うして、忠孝兩全の士と呼ばるを得たらむ、危うかりける事なりけり。かゝるためしは、唐土にも、西洋にも、我國にも、其のためし數多きこゆることぞかし。さるからに子を持ちたる母たるものは、よく〳〵心せずば叶はざるものを、徒らに、愚痴こゝろのみ深き女子は、中々に、子をおもふ道を誤り迷ひ、暫時がほどの、果敢なき老樂をもとめなどして、誠の道をば踏み迷ふ人の少なからぬぞ、あさましく、口惜しき事の限りなる。

誰なりけむがいはれたり。父なる人がかしこかれ

どとて、其の子なる者、必ず賢こかるべしとはいへざるも、其の母なる人が賢しこけれど、其の子は、必ず、かしこかるべしといはれたる言の葉は。よくころ經驗されし言の葉なりしか。

されど、母となりたるものは、よく〳〵、世の中の道を知り、人の上の理りを考へて、其の子を敎へずばあるべからず。

其の名は、高くはきこえざれど、幸田彦衛右門といふ人の母なりける人も、また、其の子をよく敎へ導き、誠の母といふべき母なりけり。天正の十一年といふ年、三月といふ月、豐臣秀吉が、織田の信孝と、心あはず、中あしうなりて、兵馬を搆ふるやうなりけるが、幸田家は、代々、織田家の舊臣にて、彦右衛門もおなじく、信孝に仕へてありたり。

是より先き彦右衛門の母なりける人は、信孝どのを生み玉ひたる後室、坂氏なりけると共に、質となりて安土の城にありたるが、秀吉は、彦右衛門をば、おのが味方に爲さむと思ひ、たばかりて、質と成りてありける母なる人を、其のまゝに捕らへ置きて歸さず、もし、我方へ降らずば、直ちに、此の汝が母をば、斬りて捨てむが如何にかといひやりぬ。

かくと打ち聞きたる母は、捕らへられたる我身は、斬らるゝも、裂かるゝも、更に恐れも、嘆きもせねど、我ゆゑに彦右衛門が心の動かむこともやと、ろを、恐れ驚くこと大方ならず、密に、一書を認めて、彦右衛門に送りて云ふやう、古へより世の

人の言葉にも、花は櫻木、人は武士といひて、世の中に、武士と櫻とを、いと尊ぶは、櫻の花は散りかたのめでたきゆゑにて、人も又武士は、國の爲め、君の爲め、命をも惜しまず、身をも省みず淸く潔ぎよく、散るべき時に散り、死ぬべき時に死ぬるものから、さぞかり、やんごとなく、めでたきものゝ限りになむ、いひはやすなる。今、我身も、武士の妻、武士の母となりて、淸く潔ぎよく、あしたの風に散らむとぞおもふ。老いたる母が、若き子に先立つは、元より、世に經る者の常の習ひなれど、何か惜しからむ、苦しからむ。今更に云はむも、愚かながら、必ず〳〵、無益の涙に泣きなせそ、甲斐なき嘆きに呉れなそ。汝は、元より織田家の武將、幸田家の子孫、武士が二君に仕かへぬ金言は、いつの世、何れの時とて、忘れはすまじ。若し　そを忘れなぞ、自らの子には、元より、父君の御子にもあらず。況して、世の中の人にはあらじ。さらでも、やがては、消ゆるべき露の身の母を惜しみて、返す〴〵武士の道をぞ誤まる事なせそ。且つは、戰場に出でゝは、中々に、身體をも、髮膚をも省りみぬが孝。まして秋におくれし露、枯野に殘る霜の身などは、元より忘るゝが、武士なる者の孝なるぞ、親に仕ふるの道なるぞ。汝、世の中の人の數にしもかずまへられん事を願はゞ、忠孝の道をぞ、夢忘れなせそ。汝終生、父の子とならまほしくおもはゞ、よくよく、武士の道をぞふみな違へそ。幸田家をな耻かゑめそ。汝、もし、母の此身を救はむとおもは

ど、徒らに、末いくばくもあらぬ呉竹の短き母が此世をのみ思はで、行末長き後の世をこそ、母がために、うしろやすくなせよかし。必ず〳〵、此の世には、最早母ありとな思ひそ。さなくて、汝が、よしや、短きわが命を惜しみなどするとも、我は、必ず、死にまさる恥は見じ。返す〳〵も、我故を以て、二心ないだきそ。時の盛衰存亡にて、主君をかへ、武士の道を破りなせそ。呉々もよと云ひ遣りしに。彦右衛門は、幾度となく、ふみをも繰返し〳〵讀みたりしが。軈て懷にまき納め、誠に、丈夫にも劣らぬ母上の御志、御身をも省りみず、我に武士の道を全うさせむと思し給ふ深きおんなさけ。かずならぬ身には候へど、如何でか御志に背き奉るべき。敵の手に懸け奉らむは、返す〳〵も、口惜しき限りにはあれど、いさぎよき御言の葉にまかせ奉らむ。許させ給へとて、涙をぞ、はら〳〵とこぼしたりしが、きつと彼方をうち見やり、さるにても、憎くきは秀吉かな。君の敵、はた親の敵、已れたゞやはと云ひさして、拳を握り詰めたるこそ、道理なりしか。

秀吉は、幾度か、母を餌にして、彦右衛門に降らむよしをすゝめたりしかど、彦右衛門の心は、金鐵のごとく、大山の如くにて、遂に動かず、うもふべからざるを知り、大に怒りて、かくまでいふを、しうねくきかぬとは、憎き奴かな。いで、我も、しうねくあたらむとて、母なる人をも獄に下し、遂に首を斬り、道路に徇したり。彦右衛門が母は、今や斬られむといふ最期に臨みても、顔色

常のごとくかはらず、振りあげられたる刀を見て、心地よげに、莞爾と微笑て、死にたりと云ふ。わが日の本の臣たるもの丶母たるものは、誰もかく、潔ぎよくあらまほしきものにこそ。

やがて、秀吉は、氏家、行隆、稲葉長通などいふ者に命じ、たゞちに兵を遣し、信孝の籠りたる岐阜の城をも取り圍み、火を放ちてぞ責めたりける。彦右衛門、弟、某と共に、今こそ君に盡くすべき時なれ、父母の敎に答ふべき時なれと、暴虎馮河、縱横無盡の奮鬪血戰して、遂に、猛火の中に飛び入り、はな〳〵しき打死を遂げたりと云ふ。げにきくに、記すに、かなりゆかしき母子が心の色にこそありしか。

烈婦のこと

永石薫風

丹州、舟井の郷、鳥羽の村に七郎兵衛といへる匠人ありけり。妻なる某、そが名のえ傳はらぬぞ口惜しき限りなる。享保の戊の戌年十一月の廿八日といふに、いたでおへる猪、あれ出で丶野といはず山といはず猛りめぐれり。八木村といふより南の方廣瀬村に入り山のふもとをめぐりて、山室村を過ぎて鳥羽村に出ぬ。この里の人なる久兵衛といへるが、畑にくさぎりたるに、此の猪にかみつかれて遂にみうせにけり。なほをらびたけびつ丶狂ひていつやむべくもみえず、されど里人どもみなかくれまどひて、一人もうたんともするものもなし。この七郎兵衛(年六十四)折ふし山にきこり

てかへさの途に、ふとこの猪のあへるに、とみにのがれかくれんすべもなくて、路のへなりける樹に攀んとしたりけるに、猪は、はやくもその衣の裾を食ひて、引きおとしてけり。しばしがほどはかたみにくみつきて、身きずつき、血にまみれて、たゝかひつゝ、れは聲をあげてしきり助をこへども、たれとて救はんとするものもなかりけり。ここに七郎兵衛が妻（齢五十餘）きゝつけて、おどろきていちはやく走りきて、わが袂をもて猪の頭に被らせ、頸にまたがりて、くみふせつ、されども刺すべき刃もなかりしかば、なほしきりさけびて、このさまをよばゝりしに、やう〳〵藤兵衛、源兵衛といへる二人がはせつきて、やがて短刀をもて猪の頸を刺し通し、四良兵衛といへるも來合せて、斧もてその脚をきりて、遂にとりころしてけり。かゝりしかば、七良兵衛はいと危かりし命を助かりて、さて後いくばくもなくして、創もいゑにけり、此のさとは、もと亀山の鎮につけりしかば、其鎮より、くさ〴〵のものを、たまはりて、其貞烈をほめ、かつしるしを、其家の門にたてゝ、其よしを世にあらはせりきとなん。（これももと、伊藤長胤先生の、ものせられし漢文にして、紹述先生文集卷の十九にあり）

あてやかなる身にうまれ、あるは武夫の家にひとゝなれるなどはおきていはず、かゝるいやしきに生ひ立ちながら、かゝる男も及ばぬばかりなる、ふるまひありつるは、まことに稱へつべき限りにこそ。

家政

活花（第四）

田邊和氣子

前號に、葉蘭と菊の、手始めの活方を圖して、初心の君達の、參考としたりしが、此二種の活かた、かばかりにはあらず、其業の熟練するに從ひて、數をもまし、活かたにもそれのれと工夫を加へ、あるはじはうに、又はうちとけざまになど、其枝葉によりてそれもむきを變るぞよき、冬の頃花なき折に、葉蘭を、二十枚ばかりも、なかしきさまに活なしたる、中々に、匂ひある花よりも、見どころあるものなり、されどこたびも、前號に續ぎて、葉蘭菊など、數を增したる、活方をかゝぐべきなれど、元よりうひ學びの、君達のためにものしたれど、今しばし此道の、進み給ひてのちにとゆづりつ。

されどけふは何をかと、庭に下りたち求むれど、さるべき花もあらざりけり、はるかあなたの、木かげに咲出たる、辨慶草とやらむいふめるは、名こそいとことゞゝしけれ、色もなき花を、誰名付けんとおもふもをかしくて、手折ぬ、かたへに咲たる、西洋の撫子ちかき頃かの國より傳へ來しものなれど、色うるはしければ、體に用ゐて、や



辨慶艸　西洋なでしこ

まと心の辨慶草と、いづれがつよからむ、何れが先に志をれ行らむ、活溌て心見給へかし。

女裁縫記

西山たい子

凡そ、世の中に、女子の學ぶべき事、讀み書きの外には、絲竹の業、或は花をいけ、茶をたつるなど、さま〴〵の藝能の數多あれども、最必要なるものは、衣類の裁ち縫ひにぞありける。されど、女子は、絲竹のわざ、いろ〳〵の藝能などは、よしや、たど〳〵しくともよかれど、此裁縫の道のみは、讀み書きと共に、稚き時より、心を用ゐて、敎へもし、習ひもせずぞあるべからず。されど、己れ、常々暇ある毎に、稚き者、婢女などに、此の道を敎へ導きなどすれど、兎角、側に敎ふる人ある事を頼みに思ひてか、裁ちざま、縫ひ方、又は、大かた定まりたる寸尺などをさへ、忘るゝ事少からず。そを、一々に敎へんもうるさく、且つは、人は推理の力といふものの肝要なるを、さぞかりに、人のみを頼みをりては、其の身の爲めにも、よからざめりと思ひたれど、一ッ身よりして、もろ〳〵の裁方縫方などを、委しく書に記して、此後は、こを見て、おのれ獨りにて試みよとて、與へたきしに、此程、國光社にゆかりある人の尋ねこされて、ふと、其記せしものを見そなはせられ、こはよきものや、今一つものしてよ。女鑑にあらはして、姫たちの參考に成さんといはれしまゝ、拙きをも省みず、此處に、そを記し出すなり。挩利屈などは知らず唯經驗のまゝ、まづ、一ッ身。

○襦袢のたち方、ぬひ方より初めん。

木綿は、大方其の巾は、九寸より九寸五分程のものなれど、通例襦袢に用ゐる桃色、樽金、晒木綿

などは、やゝ巾せまけれど、大方、八寸に一二分ばかりなる物なり。大小によりていろ〳〵異りたれど、大低一ッ身襦袢の並なるは、五尺の布あれば出來るなり。

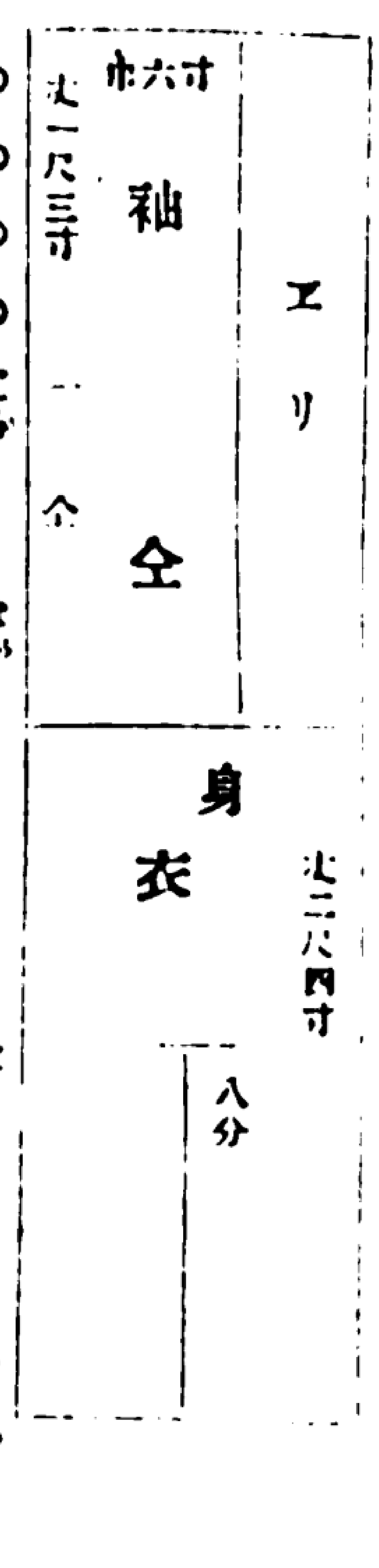
（一）一ッ身なる襦袢の裁ち方

先、尺度にて、二尺六寸とさし、そこより、條をつけて、切りはなつべし。五尺より二尺六寸とりし故、殘りは二尺四寸あるべし。其二尺四寸なる方はまづ暫く其儘に下に置きて、二尺六寸を取りたる方を持ちて、又、尺度にて條をつけて折り、さて、そを切りはなつべし。切りなば、其せまき方は。襟に成るものなれば、直に疊みて、傍におくべし。さて、六寸巾に取りたる方を、又、横に眞二つに折りて切るべし。それが、兩袖となるものなれば、又其儘にたゝみて傍に置くべし。

さて、今度は、先きに下へおきたる二尺四寸なるをとりあげ、身衣となすなり。

身衣を裁つには、まづ、巾を、二ッに、よく合せて折り、又、丈をも、二つに揃へて折り、其の四つ折になりたる物の、横なる方を眞中より八分切り、縦にをりたる方を、一方だけ切りて、さて、それをひろげるなり。かくするが、一ッ身を裁つには、一番たち安きやうなり。よく、左の圖を見合せて、たつべし。

一ッ身襦袢裁方の圖



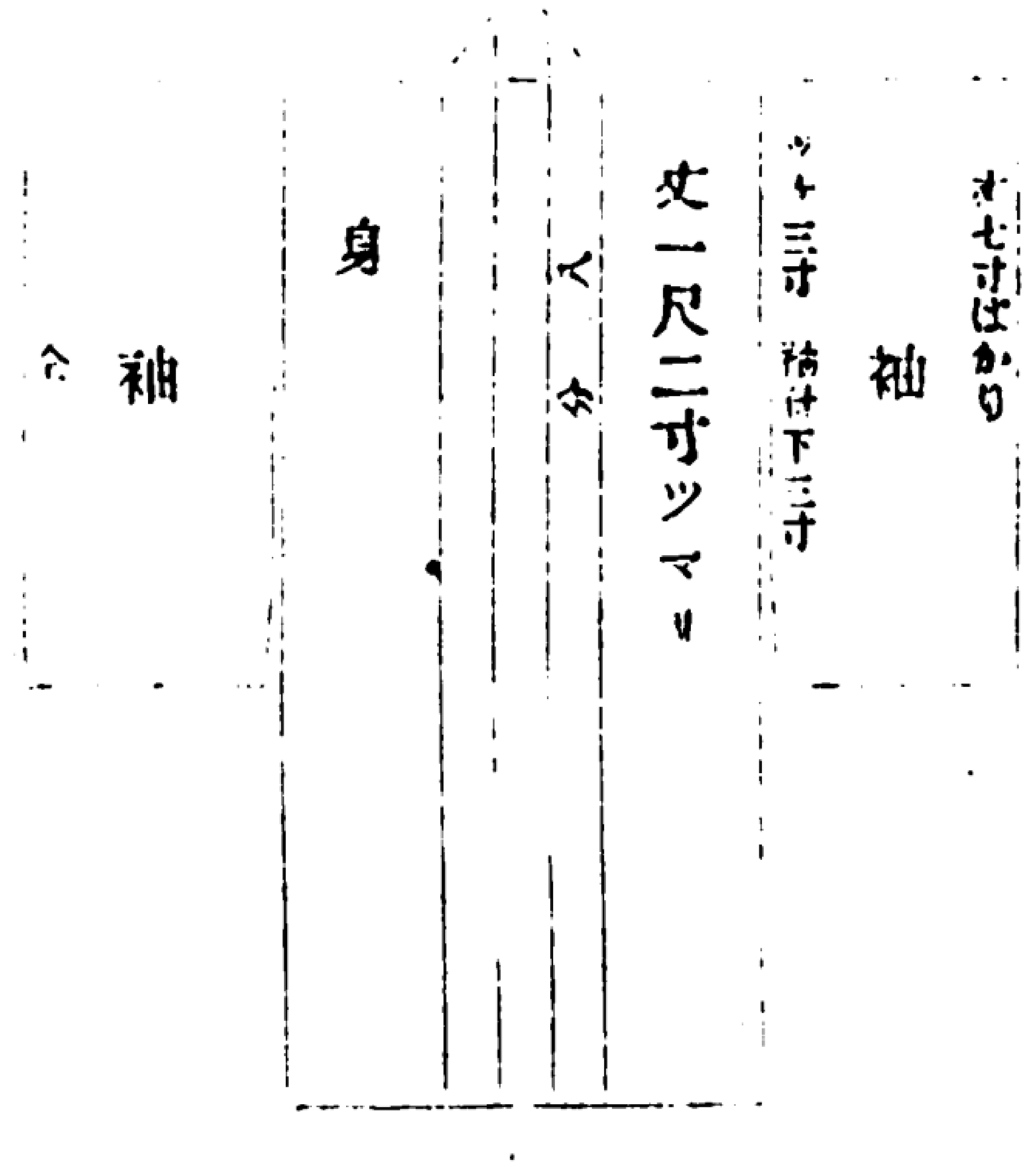
此外、袖丈身衣等を、長くなさんと思はゞ、如何やうとも之にまなびてはからひたつべし。

（二）其の縫方

まづ、袖の表面を出して、二つ折りて、よく下を合せ、淺く縫ひおき、裏かへして、其ぬひし處を、裏より包みて、袋に縫ふべし。そを、ふくろぬひと云ふ。

それより、袖口に成さんと思ふ方を、裏へ三折りにかへして、絎るなり。（但し、布のみみの方を、袖口と爲して、別に絎る事せずもよし。）さて、袖を縫ひ終らば、身衣をとりあげ、肩より六寸あげおきて、兩脇をぬふべし。其あけ置きし處を、脇明と云ふなり。兩方縫ひ終らば、裾をば、袖口の如く、裏の方に三ッ折りに、折りて、縫ふか、又は絎けるかすべし。それより、襟をば、表よりぬひ付け、襟さきをぬひて、裏の方へかへして絎ければ、胴の方は既に出來たるなり。それより、

一ッ身襦袢縫上りの圖



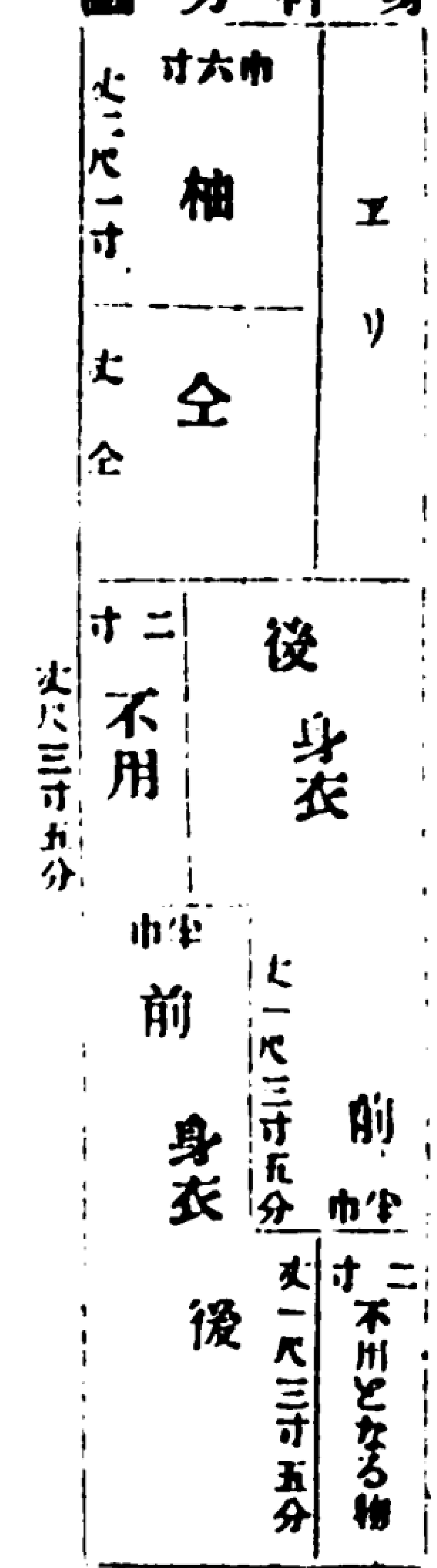
今度は、袖をとりて、附を三寸としるして、脇明の處へぬひつくるなり。つけ終らば、ふりと袖付下とを、縫代だけふせてくけるなり。よく圖を見合すべし。

（三）三ッ身襦袢の裁方

之も、また、大小さまぐ\あれど、並なるは、八尺二寸五分なり。一ッ身の如く、まづ、袖丈ぶりを度りとり、袖のわきより襟をとり、又一ッ身たちし時の如く、二ッに切りて兩袖となし、殘りの切れを三つに折り、其折目を、一方は左より、一方は右より、眞中まで、くひちがひに切り、中なる切れをば、其眞中より、縦に眞直に切りはなつべし。さすれど、中の切れだけが、半巾となりて、それが身衣の兩方の前となるなり。又其の一巾にてある方のはゞをば、二寸ばかり切りおとして、それを後身と成すなり（但し其の二寸切りたるは不用となるなりたゞしは附紐などになすもよし）よろしく圖を見合すべ

し。

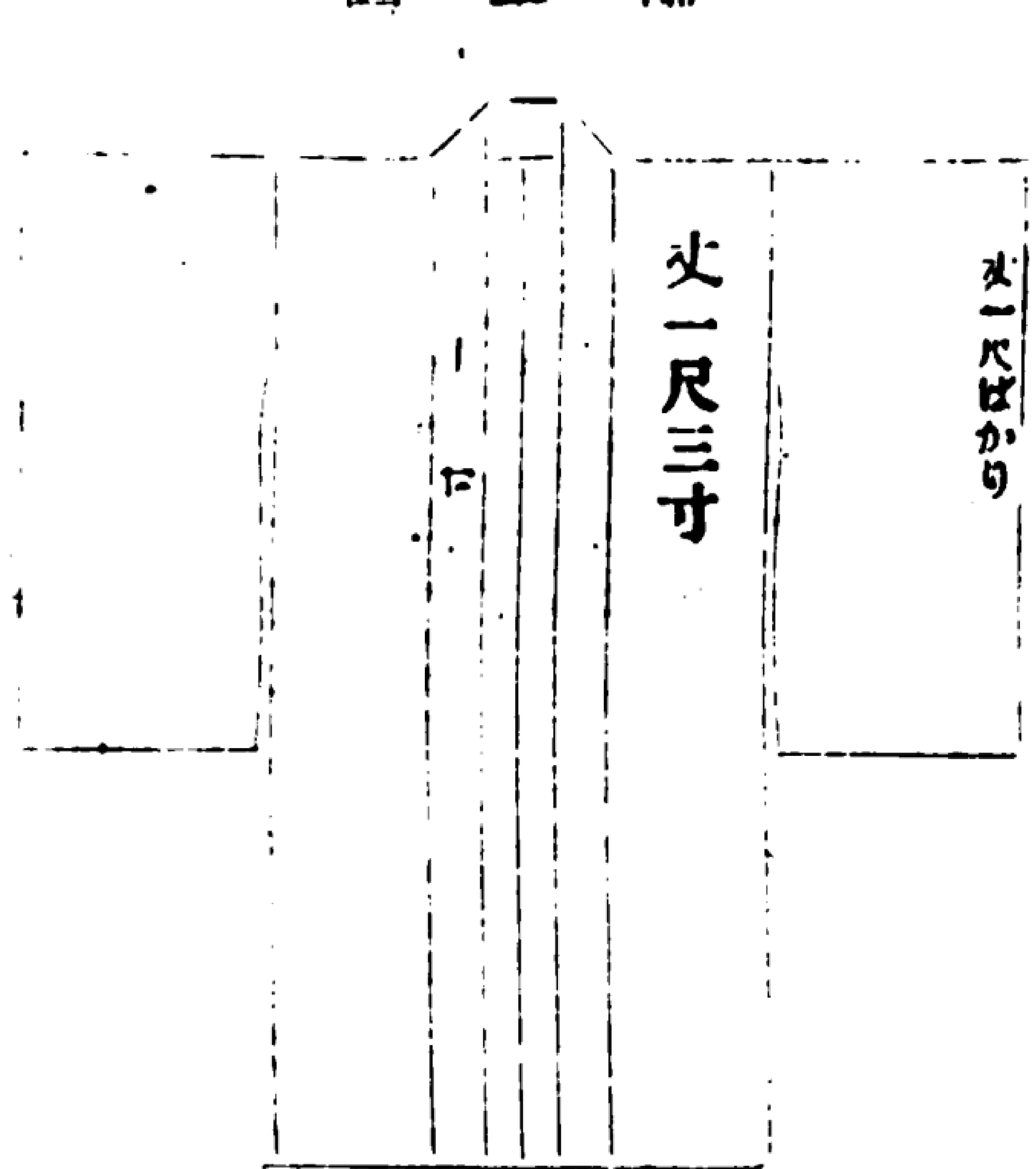
三ッ身襦袢裁方の圖



（四）其の縫方

。。。。三ッ身襦袢の縫方は、まづ一ッ身の如くして、最初に袖をぬひおくべし。さて身衣の後ろを兩方合せて、袖下の如く袋縫に成すべし。そを背縫と云ふ。それより、脇を縫ふなるが、脇明は七寸ばかり、又、下の方をも、一寸五分ばかり明けおきて、ふりの如く、ふせてくけおくべし。さて衽をし、襟をつけ、袖をつくる等は、皆一ッ身の如くなすべし。袖付は四寸五分も付くる人あれど、四寸ばかりが、着よからんと思ふ。そは人々の思ふまゝになすべし。例の如く圖とよく見合しべし。又縫目は袖下と、脇縫とは、前の方、袖付は袖の方、脊縫は左の方にかへすべし。

三ッ身襦袢縫上りの圖



だいどころ

鮎

美食散人

散人此頃、美濃に至り、鮎を食ひ、其ひとつを聞きゐたり、記して女鑑記者のみもとに送る。

あゆ、漢字にては鮎、年魚、香魚など書く、河魚

なり、春卵より生れ、春の末より川をさかのぼり秋の末川を降るまゝ海に入り、または川にて年をこゆるもありといふ。

土佐日記に押鮎を食ひしこともみゆ、其頃は煮鹽鮎、鹽漬鮎、押鮎、鮓鮎などの製しかたあり諸國より朝廷に獻りしことも多かりしとぞ。

いづこの鮎がうまきか

諸國にて產するうち東京の人は玉川の產を上品なりといへり、上戸酒を好み、下戸餅をうましとす、人々の好みによるべけれどあながちにかゝはるまじきか、美濃國長良川の鮎も世に名あり維新以前までは其川すぢにある領地小瀨村、長良村に尾州家より鵜匠をおき、鵜にて鮎をとらしめ、鮎鮓粕漬鮎うるかを將軍家に獻らるゝ例なり。

長良川の中いづこのものがよきか

東京などより行く人は滊車の都合によりて、まづは岐阜に至りて食ふを常とす岐阜の川むかへは即ち長良、此邊のものもよけれど、なほ川上の小瀨、なほ川上の立花など川をさかのぼるにしたがひて捕るところの魚、形大きく骨やはらかく、脂つよく、肉こゑて、味よし、宮內省の御用にて氷づめにして奉るは立花などよりも川上、郡上郡のうちにてとりたるものなりと承る、鮎は川下よりも川上にてとりたるものよし。

いつとりたるがうまきか

大方の鮎を食ふ人は「こ」をもちたるもの、ことに「白子」よりは「あは子」を十分にもちたるものをよしとすれど、此地方にて年久しく食ひあぢはひたる人はさるものを好まず。

夏の土用すぎ、秋のひがん十日まへまでを尤もうまきときといへり、其頃はあゆの「かたし」さしたるのみにて肉肥ゑあぶらつよきときなり、「こ」を十分にもちて後は、肉やせ、あぶらおちて、味うすしとぞ、見たるところ「あはこ」よけれど、味は

「白子」のかたあされりといふもあり。

どこがうまきか

大きなるものも一尺二三寸には至らぬもの、並のものは七八寸ならではなし、その魚のどこがうまきかといふもおかしきことながら、「ひづもと」と稱へて、頸すぢより背すぢのあたりがよしとなりはらわたもよし。

どうしてとりたるがうまきか

(一)まづ捕りかたの奇なるが爲に、遠方より來りし人は、鵜にてとらせたるを賞美するにや、鵜にてとらするとは、鵜の咽もとを、なはにて結びて、食物の腹に下らぬやうになしおき、之を川に入れとらしむるなり、鵜はおのが腹をこやさんとて、大なる口ばしを開きて、鮎をとるがまゝに一かみかみしめては殺し、殺してはうのみにすれど、腹のふくれぬのみか、やがて引あげられて、咽もとにとゞまれる魚を、鬼の如き鵜匠の手にて吐かしめられる、この吐きたる鮎は一おもひにかみころしたるもの故、うましといふ人もあれど、鵜の口ばしのあとのある爲に早く味ひをそこなふこともあるにや、口ばしのあとを見て奇なりとはむる風流人もあれど、きたなく思ふ潔癖の人もあるべし、鵜飼につきてはおもしろきことあれど事長ければいはず、

(二)小鮎のころ、あつまりをるところを、「たま」の如きものにてくみとることあり。

(三)かけあゆ、又つりあゆともいふ、「ねさ」にてつるにあらず、糸に數本の鈎をむすびおき、又其糸に、「おもり」(をうをといふべきか)をつけおき、其おもりの傍によりくるを鈎にて引かけてとる、味おとれり。

(四)網にて引よせてとる、網にてとりしもの魚いたまずして味最よろし。

(五)秋の中ごろより、川下へくだりゆくことを「お

ちる」といひ、其頭のものを「おちあゆ」といふ、おちあゆの頭には川中に梁を作りて、其中に入るものをとる、梁をうちてとることは甚ふるきことのよし、いはゞ箕の大なるが如きを川の中につくりもて水をうけ、水と共にながれ入りたるものをとるなり。

(六)「もぢ」、川の中に抗を多くうちたて、網を幾重も間をあけてはりおき、おちあゆのかゝりたるをとる。

(七)「ひぶり」、網を川に入れおき、松火にておひてとる。

(八)五十鈴川、などにては小さき四手網しづめおき、其上に鮎の入りたるときすくひとることをすれども、美濃にてはなきことなり。

どうして食ふか

(一)「水づくり」、すなはち、「あらひ」なり、糸づくりにしてあらひたるが體裁よろしけれど大にきりたるが味はよし、あしらひ、茗荷はすいもなどよし。

(二)「せごし」あゆのまだ小さきころ、骨のまゝよこにこまかにきり、少し鹽して後、酢をかけて食ふ、うろこはとりたるがよし。

(三)しほやき。

(四)ぎよでん。

(五)「あかに」、なまのあゆを味淋たまりにてよくにしめたるもの、盛りよりまへに多くなすことなり。

(六)「かつをだき」、世間にて尤よく行はるゝあゆのたべかたなり、あゆをしらやきにやき、その後鰹魚節をけづりて多く入れ味淋だまりにて煮る。

(七)「かけしほ」、しらやきにやき、薑だまりをかけて食ふ。かるくてよし。

(八)「すひもの」、などの類はいふまでもなし。

(九)「鮎のすし」、生のあゆ鹽あゆ共によし。

(十)「なれずし」、桶ずしなり、尾州家の献上物に「四月小鮎鮓、四五月内鮎鮓五月より八月まで宿次同十度」とあるもの即ちこれなり、近江の名物、鮒ずしも同製なるべし、鹽したる鮎の腹にやはらかに炊きたる飯をつめたるを、なか蓋ある桶に入れ、重をつよくかく、つよくかくれど、上に水があがるものなり、凡冬なれど二十日の餘經たるを食ひ時とす、飯はすて、鮎のみを食ふなり、一種の臭氣ありて、なれざれは食ひがたし、食ひなるれど、一種の風味いふべからざるものあり。

(十一)「あゆ雜炊」、あゆを多く入れて雜炊をたきたるものなり。

(十二)「山吹むし」、あゆの「こうるか」(下に委し)を、さわらなどの上にうすくぬきてむし、わさびじやうゆなどかけて食ふ、色どりよく味うまし。

(つゞく)

思ひいづる儘　くりや女

季節日用調理　(三)　(九月中)婦人行事

(は)馬鈴薯の飴。　これを作るには、まづ馬鈴薯を摺り卸し、水を入れ、攪拌したる後、粗きすゐのうにて漉し、それを、桶につくりおき。さて、糯米少許りを鍋に入れ、火にかけて充分沸騰せしめ、之を冷したるものへ、馬鈴薯の摺りたるもの、一貫目に付、大麥の萌芽一合五勺の割を以て、混合してまへの桶にいれ。外氣に觸れざる様注意し、毛布の類もて外圍を包み、三四回攪拌するときは皆一様に、恰も水の如くに變ず。此の時袋にて能く絞り、その汁を鍋に入れて、緩火もて徐々と、煮結めなど、大白飴ならで、

新奇の馬鈴薯の飴は、出來うべし。

(に)葡萄の實貯藏法。　これはさほど困難からねども少しく意を用ゐるべし。この葡萄の實を貯藏ふには、新に熟したる濃紫色のものを、撰み採りて、能く濕氣を拭ひたる桶又は箱に入る。こその入れ方は、器物の蓋のはうへ、葡萄房のものを繋ぎ、下へ垂れしめ、靜かに器の中へ入れ、互に擦れ合はぬだけの豫防を施し、蓋を密かに閉ぢ封じて、繩わるは細き綱にて結び、高きところへ吊し置くべし。

(ほ)林檎の菓子。　これは牛乳三合、鷄卵四個、白砂糖十匁を、檸檬一顆の皮を刻みたるものとを、混じ合せて鍋に入れ、烈火に懸けて攪き交せつつ、その沸騰するを俟ち。すでに沸騰せば、豫め林檎十二個ばかりの、外皮を去り菓心を除き、並べ置きたる丼鉢に移し。凡そ二十分間火室の中に容れて、蒸焼けば、林檎の菓子は、倚麗にできるなり。

(へ)林檎のパン。　林檎の菓子製法は、御了解になりつべし。ついでに、林檎のパンをも作りたし、との御意、あらんも知れずと、取越苦勞の老婆心に、御傳授いたすべし。こは少しく面倒なれど、いづれ甜いものを食ふには、それだけの骨折を要すること、合點なさるべし。はじめに温飩粉を、鉢に盛りて、そのまんなかを窪め、こゝに食鹽わづかと清水一合半ばかりとを加へ、能く捏ね、めん棒を以て、薄く壓し延ばし、之に牛酪六十匁を包み、温飩粉を撒り懸けて、再び壓し延ばし、かくすること再三再四して、たいてい一二分の厚さとなし、之を陶器の皿若くは鐵葉の器に布きて、中に林檎の外皮菓心とを去りたるものを入れ、處々の牛酪の小さき塊を點じて、上より白砂糖を撒り、全く其の包皮を覆ひて、周縁の出入を等しく正して切り

去り、火室に入れて、一時間程蒸焼きにするなり。但しこは、あながち林檎のみに限らず、梨、桃、梅、櫻果、等にても同じ製法にて、こしらへ得べし。たゞ榲桲の如き、その菓肉の硬きものは、砂糖の液にて、煮置くか、或は、罐詰品を用ゐるに非ずば、宜しからぬと、心得らるべし。

即時簡易治療法

この月は、さしわたり、別に心得置く程のことも、なしと思へば、省き略しぬ。

農事のしをり

上旬。　細根菜蒔、蕪菜、漬菜、水菜、虎菜、白菘菜、葉芥、黄芥菜、しんぎく、ちしや、野蜀葵、水芹、貝母、茴香、花菜(コリー、フラワー)等、ともに十月の上旬までに、播くを佳となす。

中旬。　桃、梨、牡丹、海棠、等の換接によろしき時候なり。

下旬。　芥子、豌豆、三月大根、甘藍、等播くべし。根菜、葉菜などに、肥料を施すに、拂曉いまだ暘の光糸を彩映らぬさきに、つとめて之をなさば、害虫の發生を防ぐべしと、聞く。ただし、人糞の新らしきを撒くは、惡しければ、一週間乃至十日間、溜桶中に化熟せしめたるを、注ぎて直ちに土を覆ふべし。

この頃の花。　桔梗、刈萱、すゝき、葛花、撫子、女郎花、葵、雁來紅、鷄冠花、藤袴、野菊、濱荻、芙蓉、槿、秋海棠、秋薊、秋牡丹、孔雀草、鳳凰草。

この頃の果實。　葡萄、林檎、栗、柚、橙、佛朱柑、九年母、無花果。

ある書に、つぎの文あり、抄して參考に、そなふるになん。

聚二土鼓一以迎レ寒。釣天不レ耐。建二慢亭一而張

レ宴。仙露將レ傾。四時開朗。莫レ過二於浮槎間レ石。一年快事、端不レ許二嫦蛾笑レ人。是日也鴻雁來玄鳥逸。槐黄榮。桂香飄。斷腸始嬌。金錢夜擲一香紫。蘋沿白。花盡實也。

家禽飼養

(に)この頃は、脫羽期來りて、卵を產むこと、大に減ずれど、肉、肉粉、乳等の如き、滋養素を多く含めるものを、與ふべし。もつとも水は、多く鉄分を含めるを、可となす。

(ほ)もし、この頃にて、病雛を生ずる時は、飲水に鹽砂を加入すべし。

ろへごと

七夕祭。　さきつ月に、つけくはふるを忘れたれど、たくれどせには侍れど、こゝにろふるになん。

七月七日(舊曆)の夜の七夕祭は、いまはまことに盛りならで、笹竹に願の絲をかけ、短冊に詩

又は歌をかきて、織女牽牛の二星に供て、管絃の具など、手向くること、いとも稀れなり。古へは、本朝、清涼殿の庭に、机四脚をすゑて、其の上に、箏れよびいろ〳〵のものを置き、香を焼き、盤に水を湛へて、星の影をうつすことを乞巧奠となんいへりとぞ。賤のおだ卷、操り返し、むかしを忍ぶも、ゆかしくも又みやびならずや、姫たちさは思さずや。されど、もとは、渡來の風なり。

又この月十五日(舊曆)を、中元と稱し、盂蘭盆會ともいひ、たゞ略して盆ともいふ。此日藪入あり。俗に、祖先父母の靈、饗をうけむとて、來るといひ、玉棚を玄つらへ、魂祭をなす。薄暮線香の火、幽かに赤く、供物の瓜の、ほのかに白きに、

魂棚の奥なつかしや親の顔

亡き母を慕はゞいかに

紙面の都合にて盆踊八朔の賀は重陽の宴の前にゆづりぬ

學園

我が學園（二）

鹽井正男

一、古代の歌謠

我が學園の主意は、既に、前號の紙上に記るしたる如くにて、我が學園は、文學やがて我が日本の文學園といふべきものにて、日本の文學といふべき古來の面白き書を紹介說明評論しゆくなれど、又、それを舊きより新きものと、順序を追うて、つぎ〳〵に紹介說明評論しゆきて、日本の文學たる詞華の遷り變れる歷史をも、共にのべむ事を期するなれど、万葉集より舊くは、文學書ともいふべき取りまとめたる書は見えざれど、太古にも文學といふべき物は、彼れ是れ散見せる物あれど、そが一ッ二ッを此處にかいあげて、我が極めて上れる代の文學の狀態精神の大要を記るし、さて、まとまれる文學書を、つぎ〳〵に評論しゆかむ。さすれど、千はやぶる神代の遠き昔より、あきらけき明治の近き大御代までの文學の變遷を記るす事と成れるなり。

日本の文學といふべきものにて、最ふるきは、歌謠なり。やがて、古事記日本書紀風土記などに散見せる歌謠にて、此の大八州國々を生ませたまへりといふ伊邪那岐伊邪那美の二神より、既に〳〵御歌うたひたまへり。歌謠など、すべて韻文といふべき物が、他の類の文學に先立ちて、疾く起りたる事に就きては、深き由來の存せる事なり。深けれど、明かなる由來の存せる事なり。其の由來を、いさゝかいはむも無益の業にも非ざるべし。そは、歌といふは、やがて、人の心情の、宇宙の事物に感動したるが、言餘にあらはれたるものにて、貫之が、古今集の序に、やまと歌は、人の心を種として、よろずの言の葉と成れるといひたる

ころ、よくあたりたれ。心情といふものは、世の中に生きとし生ける者は、總うじて、これを有たざる者は非じ。春山の鳥は、花にうたへど、秋野の虫は、露にむせぶといひ、鹿は紅葉散る深山邊に、妻とひてよび、雉子は眞草やく小野に、子を思うて鳴くときく。總うじて、心情ばかりは、無きはあらじ。ましてや、萬事に優れたる人といふ者、誰かは心情の無かるべき。智識といふもの丶、露ばかり無き者、はた意思といふもの丶整はざる人と雖、全く心情の空虚なる人は非じ。彼の古への舊き世に、虫けらのやう、地中に穴を掘りて棲み、禽獸のやう、動物を手うちにして、生ながら食ひ、血つきたるま丶衣たりといふ、さばかり開けざりし世の中の人と雖、喜怒哀樂の心情は、決して皆無には非ざりけり。あるは、又、西東をわかず、月日さへおぼゑざる幼稚き者と雖、大かた然り。人情は、人の天性とも天稟ともいふべきものにて、何時はあれ、何處はあれ、世の中に、人と數まへられむ者は、必ず心情なからずやは。かく心情あれど、月花のにほひ、鳥虫の音、草木の色、山川の光り、あはれなるながめはいはずもあれ、風物景色、折りにふれ、物につけ、嬉れしき、悲しき、樂しき、つらきなど、いろ〳〵の感情の動かぬ事のあるべきやは。心情の動きて、言葉にあらはれたる物、やがて歌なれど、さてころ、歌は、いと舊く、天地の開け初めにし頃より、きこゑたるなり。而して、又、上れる代には、萬の事事、今のやう具らず、文字なども無かりけれど、

（附言）神代文字の有無。　ちとむづかしき事に入り込むやうなれど、文學に痛く關係ある事なるのみならず、且ツ、もの學びする人どもは、かつ〳〵あきまへ置くがよき事ゆゑ、いさゝか此處に記るさむとするなり。神代文字などいふ物は、決して無しといふ人あり。又、日文と稱

する文字を以て、神代より文字は在りたりと爲す人あり。古書記す所、古人のいふ所、實にまち〳〵なり。文字なかりしといふ說を取れるは古語拾遺の序なる齊部の廣成が說を初めとして、大江の匡房が箱崎廟の記にいへる詞、三好の淸行が昌泰十四年の勘文中の言、貝原篤信が說、大宰純が和讀要領の一言のみならず、本居の宣長翁も、古事記傳に、文字無かりしといひ、伴の蒿蹊主は、假字本末を作り　、日文は決して神代文字に非ず、新羅の人薛聰といふ人の作りたる吏道といふ文字の、彼に絕えたるが、此處に傳りて、後の世に發見されしなりといへり。さて文字ありたりといふ說を取れるは、卜部の兼方の釋日本紀にいへるが、初めにて、日本書紀の前に、假字日本紀といふ書ありたりとし、又、神代に太兆といひて、鹿の肩なる骨或は龜の甲を燒きて、其の裂目を見て、神意を卜ふ事せり、若し文字なくんば、太兆は爲す能はざりしならむといへり。新井の白石も、出雲の大社に漆もて書ける竹簡あり、思ふに神代の物ならむといひ、又神代文字なる物、五體ありといひ諦忍和尙といふ者は、天照大神が、大巳貴命と共に神字を作られしといへり其の外にも、いろ〳〵の說あれど、最熱心に主張せられたるは、平田の篤胤翁にて、古史徵に論じ、神字日文傳を著はし、神字日文は、太兆の卜事より出でたり。太兆卜事は、天思兼命の初めたまへる所にて、日文も又此の命の作りたまへる所なりと論斷せられたり。二者いづれも、不完全、不分明、微弱なる論據にして、甚しきは臆說牽强附會の說さへあり。

おのれは、前者の說に從ふ者にもあらねど、又後者の如く、斯の如き立派なる文字ありたりといふ說にも、決して服する能はざるのみならず、

今の世に文字といふ如き物は、決して太古には無かりしと爲す者なり。唯、僅に記號ともいふべき物は、ありたりといはむとす。則ち、いまだ文字といふ境に達せざる所の記號、即ち、いまだ文字といふべき資格なき記號は、やゝ存在せしならむといふなり。何故にといふに、人間といふ者は、能く事物を以て記憶の料と爲し又我心意の代と爲すものにて、山を行くに木の根岩角などを標とし、流れをゆくに、岸の家などを、心の覺えと爲す事は、能く人の爲す所にて、又、事物を借りて我意中を表はす事も、能く爲す事にて、男女が互に心を通ずるに、藁を送り、ろれを結びて返へすと、解きて返へすとによりて、あはむあはざらむを知り、又松を以て待つの意を知らせ、蘆葭を以て諾と答へを示すなどの事は、よく田舍わたりに聞く風俗なり。神代の人とて、故に、めといふ語を◉にて覺え、はといふ語をшにてればえ、一を引きて一箇の事を示し、二を引きて二箇の物に覺えたるはどの事は行ひたらむ。太兆といふト事の如き龜甲の裂目などによりて、神意の如何を知りたりといへど、如何なる形は、兎かく〳〵といふ神意なり又かくかくといふ神意なりといふ事はありたるなり。一群の間に同記號を用られど、ろは即ち文字の初めなり。故に、おのれは、かゝる幼稚の物は存在したりと爲すなり。これが發達すれど、完全なる文字となる物なり。されど、我國は言靈の幸ふ國とて、語りつたへ言ひ傳ふる事を、むねと爲したるものから、文字の必要を感ずる事少く、かゝる幼稚なる記號は文字とならで滅びたるなり。かゝれば。おのれは、此處に、文字といふ物は、太古に無かりしといふなり。ものを記すといふ道も無く、諸々の事、皆つぎつぎに語り傳へ言ひ傳へたりしかど、調子のよきは

面白く、覺え易く、傳へやすきものから、これもかも、つとめて調をよくせむと思ふものから、韻文といふ物、好く發達して、散文などいふものは、到底、文字なき世には、發達せざりしならむ。且つ、社會は人間にたとふべく、太古の社會の人は、人間の幼稚時代に似たり。故に、目に見、耳に聞き、口に味ふ美の如き五感に覺ゆるの美は、容易に、是れを知り能ふも、心に考へ心に味ひ心に會得する如き唯心裡に感ずるの美は、容易に是れを知る能はず。故に、耳にきゝて面白き興味をも具へたる歌謠文學は、早く發達するの望みあれども、心に味ひて微妙なる美を覺ゆる如き文學は、到底此の時代に發達すべき望みなかるべし。彼れ是れの源因によりて、歌謠が、文學の先鋒と成りて、世に出でたるなり。

古事記日本紀に散見せる古代の歌謠は、長き短き、さま〴〵なるを、皆かい聚めて、やうやう百六七十首ばかりなり。神世の幾千年及び人皇の御代千有餘年の長日月の間に、唯僅に百餘首。二百首に足らざる少數。あやしきまでに僅なれど、決して怪しむに足らず。元來古事記日本紀などは、我日本國家の由來をとき、變遷を叙述せむとせる書にて、歌謠などを聚めむ事は、其主意に非るなり。故に、唯國史に所緣ある著しき歌謠を、まれ〳〵に挾みたるのみなれど、僅々百六七十首に過ぎざるなり。されど、其の歌の跡を見るに、伊邪那岐伊邪那美の二神が、天の御柱をめぐらせ給ひつゝ、互に謠ひたまひたる大御歌あり千早ぶる神々の歌ひたまへるもあり。たまちはふ天皇も歌ひたまへは、もろ〳〵の臣も歌ひ、いやしき民草さへ歌へり。思ふに、貴賤尊卑の別なく、上下に普く歌はれしものなれど、文字といふものなくて、ものに記るし置く事はせず、唯、口にうたひてのみ傳へたれど、さのみ優れざる歌は、好みて歌ひはや

す人もわらねど直に打ち捨てられけむ、又あはれに優れたるも、こゝら數多の春秋の移りゆくまゝに、何時となく忘られしもありけむ、さてこそ、古代の歌の殘れるは、冴えたる月夜の星の光りよりも、いと僅なる數に成れるならめ。こゝら數多歌ひたる事は知られたり。さて、彼の語部が語り傳へたりといふ物も、元來語るといふも、一種の曲節を附けてうたふなれど、蓋し一種の歌と爲すを得む。さすれど、日本の古代の語部の語り傳へたる物は、其のまゝに殘りたるが無けれど、見るによし無きも、推し慮るに、彼の西洋にいふ國民敍事歌といふものに似たるけしき見ゆ。これを、さる歌と爲す時は、隨分、古代の人の思想の豊富雅麗なりし事は、宇內の萬國に誇るに足れりといふべし。

さて、古事記日本紀に散見せる古代の歌謠は、如何なるものなるか。これを先づ一ッ二ッ擧げ置きて、さて、古代の歌謠の精神狀態を尋ね、又如何に後世のと異れるかを評論すべし。列擧せる左の歌謠の上に、番號を附せるは、後に評論を爲す時に、同歌を、幾度も新に書かむ事を避けむ爲めのみにて、別に年代の前後を記るせるに非ず。又務めてさまぐ〱なるを示さむと欲せる故に、善きも惡しきも、面白きもおもしろからぬも、めでたきもいやしきも、美しきも醜きも、さる區別をせでかい擧げたり。

一、(伊雅那岐神)
　あなにやし、えをとめよ。

二、(伊邪那美神)
　あなにやし、えをとこよ。

三、(仁德の御卷)
　みなそこに、おみの少女を、誰れやしなはむ。

四、(神代の卷)
　あか玉は、尾さへ光れど、白玉の

君がよそひし、たふとかりけり。」

五、(仁德の卷)

やましろの筒城の宮に、もの申す
わがせを見れば、涙ぐましも。」

六、(顯宗の卷)

やまとべに、みかほしものは、おしのみの
このたかきなるつのざしの宮。」

七、(齊明の卷)

あすか川みなぎらひつゝゆく水の
間もなくもおもほゆるかな。」

八、(神代の卷)

八雲立つ出雲八重垣、つまごめに
八重がきつくる。」その八重垣を。

九、(景行の卷)

朝霜のみけのさをばし、まへつ君
いわたらずも。」みけのさをばし。

十、(繼體の卷)

ひらかたゆ、笛吹きのぼる。」近江の野や、
けなのわく子が、笛吹きのぼる。」

十一、(允恭の卷)

わがせこが、來べきよひなり。」さゝがにの
くものふるまひ、かねてしるしも。」

十二、(應神天皇)

ちばの、かどのを見れば、もゝちたる
やにはも見ゆ、國のほも見ゆ。」

十三、(日本武尊)

尾張に、たゞにむかへる、一ッ松、あはれ一ッ松、
人にありせば、きぬきせましを、
大刀はけましを。」

十四、(大國主の御神)

やちぼこの、神のみことはやしま國、越の國
に、さかしめを、ありときかして、くはしめ
を、ありときこして、さよばひに、ありたゝ
し、よばひにありかよはせ、たちがをも、い

まだ解かずて、れすひをも、いまだとかねど、をとめの、さすや板戸を、おろぶらひ、わがたゝせれど、ひこづらひ、わがたゝせれど、あら山に、ぬゑは鳴き、さぬつ鳥、雉子はどよむ、庭つ鳥、鷄は鳴く、うれたくも、鳴くなる鳥か、此の鳥も、打ちやめこせね、いしたぶや、天馳づかひ、事の語りごとも、こをぞ。

十五、(神武天皇)

宇陀の高城に、鴫わなはる。わがまつや、鴫はさやらず。いすぐはし、鯨さやる。こなみが、魚こはさど、たちろどの、みのなけくを、こきしゑね。うはなりが、魚こはさど、いちさかき、みのおほけくを、こきたびゑね。ゑゑしやこしや。こはいこのふぞ。あゝしやこしや。こはあざわらふぞ。

十六、(吉野國樔人)

かしのふに、よくすをつくり、よくすにかめる、ねはみき、うまらにきこしもちをせ、まろがち。

十七、(雄略天皇)

こもりくの、初瀬の山は、いでたちの、よろしき山の、わしりでの、よろしき山ぞ。こもりくの、初瀬の山は、あやにうらくはし、あやにうらぐはし。

これらは唯一ッ二ッ擧げたるのみ。なほ悉皆見むと思ひ給ふ姫たちは、古事記日本書紀を繙きたまへ。古事記には、古事記讀本とて、近頃板にのぼりたるあり。姫たちが讀みたまはむには、平假字なれど、好き書なり。歌の意味を知らむとればさど、本居宣長翁の古事記傳及び○○○○○の記紀歌解などいふ書あり。さて、これより、此の古代の歌諸の評論に入らむ。

漫錄

好こそ物の上手

故人　小山田與清

物は好不好によりて上手下手の差別あり。諺に好こそ物の上手なれといふはさることなり。史記日者傳の補に其地にあらざるにこれを樹うれば生ひず。其意にあらざるこれを敎ればならず。子孫を敎ふるも其好む所を見るべしといひ、源氏物語にも、たて好せたまへばにや、繪を似なく書かせ給ふ、と見え。袋草紙にも、すきぬれば秀歌よまるるよしいへり。學問を好ば學に通じ、武藝を好ば武藝に通じ。政理を好ば政理に通じ。卜醫を好ば卜醫に通じ。書畫を好ば書畫に通じ。伎術を好ば伎術に通ず。刀劍を好ば刀劍あつまり。金銀を好ば銀金集り。酒を好ば酒徒あり、聲色を好ば聲妓集り。奕を好ば奕徒集り。惡を好けば惡徒集り。

佛を好ば佛者集り。儒をすけば儒者あつまり。神道をすけば神道者あつまり。蘭をすけば蘭學者あつまる。これみな、同氣相もとむるのことわりなり。梁の武帝佛に淫すれば天下佛に靡き、唐の武宗道に淫すれば天下道になびく。されば人世の物にすくこと偏頗のもとゐなり。また好ばも集りがたきものあり。聖賢に友あつまりがたく、清淵に魚あつまりがたし。廉直にはまげて從へども、遂にひるがへるもの多く、忠烈にはつとめて組すれども、終を果すものなし。人はつとめて善を擇びて好べけれども、人生は必ず一方に好べからず。これ修身治家平天下の大綱なり。

貝原益軒娘へのさとし狀

今度よそへ嫁れ候事、誠にめで度覺えまゐらせ候、隨分心やさしくさゞれ石のいはほと成て苔のむすまで繁昌して、末永くとねがひまゐらせ候、よろづ硯に

むかひ、一筆申入まゐらせ候。
第一、慈悲の心ありて、人をあはれみ、いきとし生ける、その道理をしらで候べきや、虫けもののうへまでも、情をかけ、唯表は青柳の風になびくがごとく、心は石かねよりもかたくして、仇なるふるまひ、努々あるまじく、賢臣二君につかへず、貞女兩夫にまみえずとは、此ことわりを申なり。朝夕心にかけ、給はゞいのらずとも、神佛もまもりたまふべく候。
第二、客人の御わたり候ときは、たとへ心の中にさはる事候とも、いさゝかそのけしきなきやうに、執はやし、高き賤きへだてなくうちむかひ、春は花鶯、夏は卯花ほとゝぎす、秋は千草、冬は霜雪と、其のをりにふれたる物語りして、懇にもてなすべし。されども年わかき人のあまりに睦まじけなるも、いかゞ有るべき、たゞ何となくかたくなきやう、あい〳〵しく候はむこところあらまほしく候。
第三に、召仕のもの麁略にして、何事も思ふまゝにならざる事有るべし。よく其の品をいひきかせ給ふべし。たとへ異見するとも、人目すさまじくあるべからず。まして主などの聞きたまふときは、いよ〳〵口をしう思ひ参らせ候。いかに見めかたち麗しき兒女房も、はらたてたる顏をせ見にくきものに候。聞き入れまじきものとみえ候はゞ、たゞ何となく里へかへし候へ。あまりに教訓つよく候ては、かへつてあらぬことをもよろへあしざまにいひなし、のちにはにげうせ候事もあるものなり。歌に、

みよし野のなつ見の川の川ごとに
　　鴨ぞなくなるやまかげにして

此の心は見よし野の川水はやく、鴨は水にすむものなれども、あまり水はやき處には、住がたく淀む所にあそぶ物なり。いはむや、人のはげしき處

には住がたし。

第四、夫婦の間は、たかきもいやしきも、むつまじき事こそめでたくよろの聞ゑも、心にくゝ候へ、たとへ千とせふるとも、あるじに露ほども見れとされぬやうに、朝夕萬にわたりて、たしなみ給ふべし。うき世の中のありさまを、つくぐ見給ひ、心ながら持ちたまはゞ行末はんじやうあるべく候。

つらけれど恨みんとまで思はゑず
たゞ行すゑをたのむばかりに

此等のことわりを實にと思ひまゐらせ候。扨またあるじ遠路へ行給ふをり、又は家内の用ゑげくて、草臥などの折からは女ながら心をつけ、人をもいさめ給ふべし。さりとて、又あまりことゞしく候半んも、けはしきものにて候。たゞ何事も改る事いかゞあるべく候。

第五、我に親しき人、又疎き人なりとも、等閑に候はむ事あるまじく候。たゞ何となくうるはしく、持なし給ふべし。よき事を申さむ、實にと思ひ、あしき事は打すて給ふべし。聊無心がましき色見ゑさせ給ふべからず。さあらむよりつきよかるべし。

第六、あまりうちゑめりて、病人のやうに見ゑさせ給ふも宜しからず。又あまりむだくと口利高笑ひも猶見ぐるしく候。只男も女も、ものいひ過し候事惡く候。口は禍の門舌は禍の根と申す事實にもとれもひまゐらせ候。

物いはじ父はながらのはしぐら
雉子も鳴かずむねられざらまし
ほとゝぎす人も言葉のおほけれど
品すくなしと一聲ぞなく

かれこれ思ひくらへ給へかし。

第七、うたひまひ見る事きく事たとへ心に染ずとも、人の奔走ならむには、おもしろきさまに取りなし給ふべし。さりとてあまりにすゞろめきたる

も、いかゞに候。又よそよりしていさゝかなる物來り候とて、はや〳〵しき返事などあるまじく候。用にたゝぬものとて使などの見聞候はむ處にて、うち捨て給はむ事、無下にうたてあるわざに候。されどとて、これもいたくうれしげなるやうもあしかるべく、總じて何事も心の前にて、おはしまし候へども、能きが上にもよきやうにと、思ひまゐらせ候て申入まゐらせ候。猶めでたき事かさねて申承りまゐらせ候めでたくかしこ

大石内藏助の内室石子の文

このごろ、ある人のもたれしを、うつしとりつるなり、とて無名女よりおこされぬ、その添ぶみにいへる、この石子は當國豊岡町石束家の女にて、才氣ありしがうへに、義心いとかたかりしかど、大石氏に嫁ぎてよりも、よく貞節を守り、夫みうせては、專ら家庭の敎に心を用ゐきとなん、とぞいふ、今この文をみれど當時のさま目のあたりみゆる心地して、いとあはれなり。いさゝか假名ちがひなどみゆれど、かゝることは今いふべきにしもあらずなん。

此度はよふぞや御使者細々との御文下され忝な
不申候へさもだん那初一家中大きにさふわく一日を千秋さ後の
く拜し上參らせ候彌々どなた樣にも御そろひ遊し
成行き心づかひ案暮し參らせ候定て旦那方よりは委細御し
御機嫌よく御渡らせられめで度ぞんじまいらせ候
らせ候はんさ察し參らせ候がやうの御事御たがひに武家のなら
偖しも當月九日江戸表より大變のやふす申來り御
ひ覺悟さは申ながら扨々さふわくいかゞ成行かさ御さつし可被
邊樣にも早速御きかせられそふ〳〵御見舞として
下候殿樣の御程なんぼうか〳〵おそれいり參らせ候なりせつ
御使者くだされ忝なく存上參らせ候其後十一日の
差こみあさよりおい〳〵申あげ參らせ候など〳〵どなた樣にも
朝七ツ頃原總右衛門樣大石瀨左衛門樣御はやにて
よろしく御申上られ賴上參らせ候主税儀も先もじよれつり

御歸り殿樣切腹遊ばさせ候よし扨々大變の御事によく今に氣おもく食事もたべ不申困入參らせ候去かしかくべて恐入まいらせ候我ら女の儀に御座候ゆへ委細くつの儀も御座なく追々よろしく候はんと存參らせ候あひた御あはしくはうけ給りんじ被下ましく候かしく

大石内藏助　内

三月十六日

石束

御かもじ樣

參ろ御返事

織田信長公の書簡

日下寛

織田信長公の書簡といふは、豐臣太閤が織田公の部將にて、猶藤吉郎と稱せし時、公より其夫人淺野氏へ贈られしものにて、本文は木下肥後守の所藏に係れり。文意丁寧親切にして、太閤が追々立身するに随ひ、糟糠の妻に不足の情を生ずるに依り、夫妻を諭して、琴瑟調和せしむるものに似たり。而して織田公が善く諸將を遇するの親も、其一斑を窺ふに足れり。

れはせのごとく。こんどは。このちへ。はじめてこし。けさんにいり。志うちやくに候。ことにみやけ色々うつくしさ。中々めにもあまり。ふてにもつくしがたく候。志うきはかりに。このはうよりも。なにやらんと思ひ候へど。そのはうより。見事なる物。もたせ候あいだ。へちに心さしなく候まゝ。まづ〳〵このたびは。とゞめ〳〵かさねてまいるのとき。それにしたがふべし。なかんづく。それのみめふりかたちまで。いつぞやみ〳〵折ふしよりは。十の物二十ほどもみあけ候。藤きちらうれん〳〵ふそくのよし。こん五たうたんくせ事候。いつかたをあひたづね候とも。それさまほどのは。又二

たび。かのはげねすみ。おひもとめがたきおひだ。これよりいでは。みもちをようくわいになし。いかにもかみさまなりに。おもく〳〵しく。りんきなとも。たち入候ては。まかるべからず候。たゞしをんなのやくにて候おひだ。申ものゝ申さぬなりにもてなし。まかるべし。なをふんていにはしいり。はいけんこひねがふものなり。又々かしく。

朱印　のぶ

藤吉らう
　をんなども

按するに太閤が筑前守となるは、天正元年即三十八歳の時にして、其年八月朝倉氏滅び、太閤攻て小谷城を抜き、淺井長政父子の首を獲しかば、織田公其功を賞して、淺井氏の領地を賜ふとあり。本文年月日を署せずと雖も、事實に據て之を推に、想ふに當に其前後の事なるべし。（史學雜誌）

母其の子を拜す

馬醉木舍

伊藤仁齋翁、世にきこゑたるいみじき德行ある人なりしが、又其の德の一言以てれふにたるべき事あり。そは東涯翁のかきたる、仁齋翁の行狀に、母に孝なりしことを述べたるところに、翁はきはめて貧かりし頃、細川越中守、幣をあつくして翁を招きぬ。時に母孺人疾をやみたりしかば、保養に人なきゆゑをもて辭せり。其の後年、母病あつく終に臨み、手を合せて、翁を拜みしとぞ。蓋翁が孝養のあつきを謝せしならん。人みな感泣せりといふ。まことに、母も子も世にありがたき、有德なりけり。

伊達模樣

仝

關東の人、衣裳の模樣、或は縞などの大形にて、

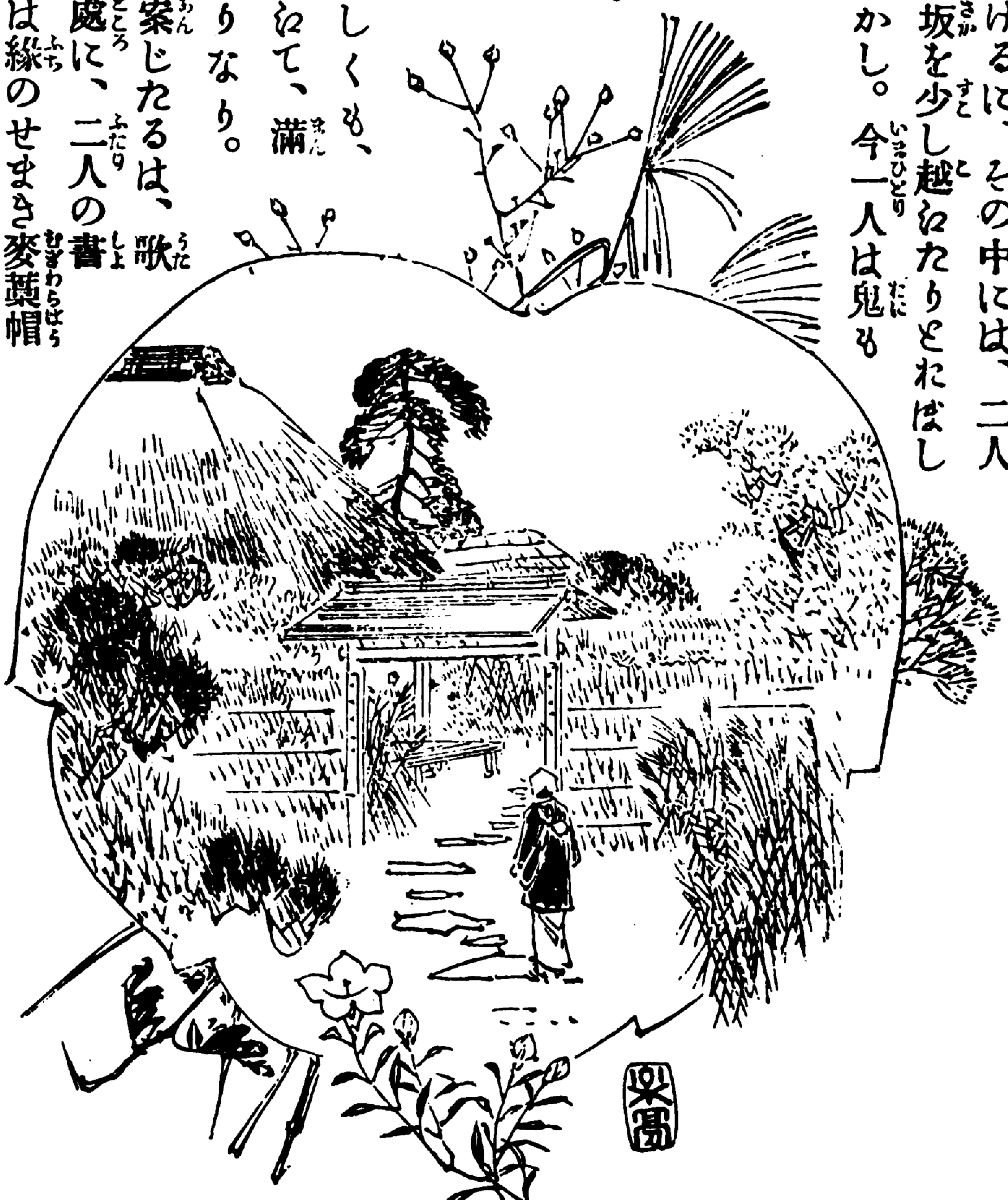
はでやかなるものをも、總べて伊達模樣といふ。これはむかし、寛永十二年正月二十八日に、伊達正宗二ノ丸にて、將軍家光を饗しける時、立花宗茂等の老臣たりしが、將軍以下皆はでやかなる伊達衣裝をつけたり。政宗は時に年七十一、淺黃に金紋つけ、紅の裏なる、上下を着たり。庭上にて能樂あり。政宗みづから大鼓をうち、又童踊などさせて、頗興ありしことなり。たゞ酒井忠勝は、この日の奉行なるが故に、ひとり熨斗目に長袴つけたれど、殊更に威儀しく見ゑたり。これよりぞ大形つきはでやかなる衣裝、都鄙に流行して、伊達な衣裝などいふ形容もおこりしとかや。

七草の花

二十二木生

都のあつさの堪へがたきに、風通ふ隅田川邊は、浪の花と共に、まだきも秋の立つこともやとて、夏衣肌に輕き、小石川のやどを、ひとりたち出でて、鳥がなく、あづま橋をうちわたるに、風の聲、水の色、はや浮世をはなれたる心地せり。むかしこと問ひにけむ、沖のかもめの、ゆく水にむかしをかこち顏なるもをかしきを、青葉の影淸き十里の長堤、春の名殘りは、むなしく長命寺の餅の名にとゞまりて、かよふ人も稀なるに、こゝろなかなかにすが〳〵しく、やがて白髭のやしろの前にいたるほどに、夏の野のあはれをもとはゞやとて、百花園といふに入りぬ。すゝきいまだ穗にいでず、萩の花もいまだ開かざれども、そよそよと吹き來る風に、むらさき色こき花と共に、葛の葉のひるがへる、いとうらめづらしく、さき出たる撫子の花の、つゆはしげなるも、あはれなり。その外、かたへにたてたる木の札にしるせる文字によりて、はじめて其名をしりたる草花ども、千々にさき亂れたる、たとしへなくをかし。れはかた見

つくして、とある茶亭の側に來りけるに、その中には、二人の女やすらへり。一人は五十路の坂を少し越えたりとおぼしきが、切下髪の隱居姿、いとけだかし。今一人は鬼も十七八の娘盛り、花の唇、月の眉、當世風の丸顔の、ほゝゑめる、香露のしたゝらむばかりなるに、雪よりも白きやわ肌に、着なしもめでたき一重の透綾に、襦袢の色わかく見えすき、漆よりもつやこきぬる玉の黑髮、高髷に結ひて、ちんころの半掛かけたる、うるはしくも、やさしくも、げに高家の姬君と覺えて、滿園の草花も、爲に色を失はむばかりなり。紙のべ、筆とりて、しきりに打ち案じたるは、歌などよまむとにやあらむ。かゝる處に、二人の書生、そこに來かゝれり。その一人は緣のせまき麥藁帽子被りて、身には麻の洋服つけたり。今一人は、同じ



く縁のせまき麥藁帽子被り、薩摩飛白の單物に兵兒帶締めたり。さてこの二人は、亭の前を通りけるが、ふとくさむらの陰に一の石碑のたてるを見て、そか前にたちとまりて讀みはじめぬ。その碑には山上憶良の七草の花の歌をきざみたり。されど、萬葉假名のまゝにきざみたれば、讀みがたくやありけむ、いく度となく讀みかへしたれど、遂に讀み得ずして立ち去らむとするとき、俄にがや〳〵といふ笑聲、亭の中に起りぬ。見れば、かの二人の貴女の、石碑と二人の書生とを見くらべて、高く笑ふなりけり。あさましや、有名なる憶良の歌を讀み得ざりしをあざけり笑ふにやと思ひつゝ、なほたゞずみて草花を見居たるに、やがて、その貴女もまた立ちさりぬ。急須など、とりかたづけむとて、茶屋の女二人ばかり來りけるが、貴女の後姿を見て、げに人は、みかけによらぬものなり。よしや、おのれはたやすく讀み得るにもせよ、貴女の身として、妄りに人のよみ得ざるをあざけり笑ふことやはある。かくてはその心も見ゑすきて、いとあさましうなむなど、云ひのゝしるに、こや〳〵、女はたしなみ深かるべきものぞ。かの貴女のことはさておき、そなたたちも、女の身として、そのやうな惡口は言はぬものぞ。のどのかはきたるに、とく飲水もてこよといへば、かしこまりぬとて、頭かきつゝたちさりぬ。

九十九髪

大町桂月

（一）

七十路ばかりなる翁の、髪の毛少しばかり頭の後に殘りて、長き頤髯、雪よりも白きが、眼鏡を額に預け、吸殼のみ殘れる雁首、斜に口に啣へたるまゝ、兩手を八字形に頰杖つきつゝ、餘念もなく

讀み入りたる一冊の草子の、版本にはあらで、寫本なるが、「飛鳥川」といふ表題の文字、まづ表紙にうるはしく御家流にしるしいだされ、女子の筆のすさびとおぼしくて、水莖の跡さへ、いとやさしげなり。そも、この草子の中には、何をか記せる。いざ、此翁の小聲に讀み出すを聞かむ。

◎　◎　◎　◎　◎

四十年あまりの長の月日、思ひしのべること、人に明さむと思ふ心もなけれど、この白髪の婆となるまで、人の家に嫁入せず、獨身にて世を送りたる事の故由を記し置かむ、或は庭のをしへのかたはしにもやと思ひつゞけたるこの年頃、今ははや六十路の坂を越えて、齒落ち、腰曲り、殘る命はいくばくもあらじと思ふに、せめて手足のたつうちに、この頃の小春日和、ほく／＼と暖くて、心地いと快きを幸に、日當りよき窓の下に筆とりて、いでや、思ふことゞもしるし置かむや。

妾、この王子の里に住みてより、數ふれど、はや四十年の歲月を經たり。まことや、昨日と過ぎ、今日と暮れて、あすか川、流れて早き月日によどみなく、榮枯得喪、またゝく内に遷りかはりて、げに、人の世は一炊の夢なりけり。すぎ越し方をかへりみれど、苦しき思に覺えず袖をしぼりたることもありき。切なき心のやるせなくて、夜もすがら獨り泣き明かしたることもありき。その時こそは、苦しとも、また切なしとも思ひけれども、なべて夢と消えたる昔の事ども、たとひ樂しかりきとて、嬉しかりきとて、今はた、いかでか心にしかと分くべき。苦しかりし夢も、樂しかりし夢も、共にむなしく覺めては、唯殘るものは現在の身の上、畢竟、世には苦なく、樂なしと悟りぬるものから、ことわり知らぬは袖のしづくにて、玉のやうなる赤子、膝にのせ、がら／＼を手にふり鳴らして、坊やは好い子と、高く呼むゝる聲に、自か

ら驚きて目を開けど、空しき閨に鐘の聲しづみて、燃え殘る燈火の影かすかなり。

軒傾き柱ゆがみたる草の屋に心細くも唯獨り住みなれては、さすがに、始の如くは物憂からず、世を渡るたつきとて、はか〲しからぬ身なれども、止むを得ず、村のわらべだちに、讀書、習字、さては裁縫など教ふるに、師匠さまともてはやされ、衣食には事を欠かずして、今日まで甚しき病の苦もなく、都の塵を餘所に見て、後やすきものから、またものさびしき身の上、半ば朽ちたる門の扉は、叩く人なしと知りつゝも、なほ橘かをる夏の宵は水鷄の鳴音にはかられ、天地も氷る冬の夜には、庭の筧さへ音づれず、人目も草も枯れはてたる片田舍の一軒家にも、一陽來復して春を迎ふれど、軒端の梅はゝゑみて、鶯も來鳴くに引きかへ、身は埋木となりはてゝ、花咲かむ折もあらず、いつも冬枯の身の心も自から凋れ、月と花とに涙の數々添へて、流れゆくあまたの月日、つもりて久しき四十年の浮沈を、唯一場の夢と見て、今もなほ夢の心地になむ。

妾は今かく零落れたれど、氏は春野と云ひて、もとは五千石領したる旗元の家柄、父の名を茂基と云ひ、母の名を雪子といひき。同胞は唯一人の兄ありて、その名を梅太郎といひき。また、妾の名は、如何なる親の心なりけむ、土塊にも劣る身の玉子とはいとはづかしうなむ。

思へば世に妾ばかり不幸なる人は、多くあらじ。父には、いとけなき時、死別れたれど、その顔だに覺えず、言はむ方なく悲しきに、母にもまた小學を卒業せし年、死別れたり。その時の事ども、今更語りいでじ、語るも涙の種なれど。

唯一つ忘れがたきことは、母君は自から起たざることを知りて、妾を枕元に呼び寄せたまひ、夕を待たぬ身なりとも、せめては梅太郎に嫁をとり、ま





たそなたの身のかたづくまでは、いきながらへてあらむと思へど、定命なれど、如何ともしがたし。これよりは世にたより少なき二人の身の上、唯梅太郎を父とも母とも頼みて、よろづその敎をうけよ。また言ふまでもなけれど、平生常にいましめたる女の道は、かへす〲も踏みな違へそとて、眠るが如く此世を去らせたまへり。此時兄の年は二十歳、妾の年は十五歳なりけるが、共に孤兒となりて、天にも、地にも、血を分けたるは、唯この二人の兄妹、心細くも、悲しくも、かたみに頼み、頼まれて、影の如く相伴ひ、しばしも側をはなれざりけり。幸に時といふ老女の、いとまめやかなるが、年久しく我家に仕へ、母親なくなりて後も、何くれとなく身に引きうけて、世話して呉れしかど、家の事はおほかた打任かせて、妾は兄と共になは學の道をたどりぬ。さは云へ、家の女主人とては、妾より外になければ、全く家の面倒見ずといふ譯にも行かず、お時に主人とたてられて、早くも世帶の苦しみを知り、今更に母君に時の流行品をねだりし昔のなつかしく、は、そのめぐみの露に生ひたちし撫子の身の、浮世の荒き風に當り、人の心の頼みがたきを知るにつけ、まだ子といふものは持たざれど、そのかみの親の恵は、身にしみて辱なく覺えぬ。當時、兄なる人は、さる學校に入りて、西洋の學問をいそしみ、妾はむねと敷島の道にわけ入り、よな〱燈火の光をわかちつゝ、共につゝがもなくて、三年四年は、矢よりも早く立ちにけり。ある春の夕の事なりき。兄なる人は、同じ學びの友だちの親睦會にとて、出でゆかれけるが、その夜、更たけなはに、人靜まりたる頃、車の音俄に門の前にとゞまりて、間もなく門の戸の開くに、さては兄君の歸られけるにやと、ランプ手にさげて玄關に出でけるに、兄はいたく醉ひて、物心も

覺えざるを、兩手に抱きつゝ、いたはり助けて入り來れるは、兄と同じ年頃の學生なり。おのれは、川田清憲とて、學校にては、御兄君と御入魂にいたし、色々御世話かける者なるが、今夜、宴會にていたく醉ひたまひたれど、靜に車にのせて、御送り申しぬ。夜もはや更けたれど、これにて失禮仕る。よきに御介抱あられよと、聲いと爽やかなり。川田氏のことは、日頃兄が篤實なる勉强家なりとほめそやすに、その名は知り居たれど、まのあたり其人を見るは、今日がはじめなれど、兄が平生その世話になること、さては、今夜の介抱のことなど、一通り禮をのべ、茶でもたて侍らむほどに、まづしは休みて行かせたまへとすゝむれど、そのやうな御心配は御無用、おのれは、人の家に居る身なれど、餘り夜をふかしては都合惡し。いざゝらむとて、立ちてゆかるゝに、はや十一時を報ずる鐘の音、陰にこもりていとかすかに、櫻の枝にやすらへる朧月の影もねむたげなり。

可憐孃　　中尾鶯夢

（三）村落の花嫁　下

あはれ三十路を、六つと重ねし春秋、猶未だ盛りなるに、天壽命を假さず、無常を誘ふ病蓐を、冥路の首途と爲して、惜しや今一際にて、咲き綻びなん稚兒櫻に、心殘して敢へ無くも、黄泉の客となりにける大吉。跡には妻のお菊、杖柱とも賴みしわが夫に、わかるゝ愛別離苦の悲しさは、あこがれては天に叫び、嘆きては地に訴ふ、紅涙袖に湛へて、袖や朽ちなん、哀情喉に咽びて、喉や枯れなん。

逆に立廻したる六曲屛風の前、經机に据ゑし線香の縷の如き烟濛りて、高く立上らぬも悲しき心知りてか、いとも哀れに、大勢村人の合掌なし

て、一齊に唱ふる念佛の聲、打鳴らす鉦の音、無常なりける次第なり。

☆　☆　☆　☆　☆

葬の事了りぬ。菩提の寺に一塊の土饅頭、草の色蒼緑なる中に、一基の卒塔婆、斜に傾きし四下、雨に破れ目の見ゆる白張の提灯、幾度か風に吹き動かさるゝも哀れ、手向けし稚兒櫻の枝も、生前の遺憾を慰めんとての心遣ひ、花の色の褪せて地に布くは、便なくも又無慘にて、舂く夕陽に、傍近く騒ぐ群鳥の、聲悲しげなる、中々に忌はしく、憂愁を増す種ぞかし。

香華供へて立歸りしお菊、何時もながらうち萎れし姿、其の儘に座敷の內。いつの間にか來りけんお菊の爺親、出迎へつゝうち微笑み、『怠りなき墳墓參詣、この爺も滿足。さて今日は、ちと相談ありて來りしこと、そなたも承知の通り、大吉殿逝去りしろの砌、くれ〴〵も後な賴むとの遺言。われも最早寄る年波、田圃の事は一切、弟の三五郎に委ね任し、老後の樂に、明日より隱居の身體。さりとて、餘り閑散の屈托も、心の毒。われは、こなたに力を添へ、常花が成長、見屆けたき心願。これから召使の取締、田畑の巡廻等、何くれと世話したきなり。』相談との言葉に、何事にやと胸を跳らせしに、却て嬉しき爺親の深切、親の慈愛厚きに、涙脆き質の、はや悅び涙一雫、頰を傳ひぬ。『こは願ひても得難き、爺親が御意、わらはよりと思浮みし箭矢』と深くも悅びて。愈々井本家は、れ菊が爺親の保護の下に、益々榮ね行くこそ、愛出度けれ。

☆　☆　☆　☆　☆

隙行く駒の跢跡早く、過ぎ去る月日の關守なく、春謝し秋辭して、三度重れる年、常花は、五つの歲の少女姿、箸を片手に握り持ち、乳房に頰を擦付けて、生懸けの若齒一ッ二ッ、齒莖の肉を破り、

けれど、折々は咬み絞めて、母を愕かせ困らせしこともありき。

常花、天の成せる麗質、發育つと共にますく美しく、恰も雜草の裡に、優しく咲める菫花、隣りのお松、向ひのれ杉に、可愛がられて妹寵愛、田の草把りに誘はれ、摘花なせる姿は、群雞の中に交らふ眞鶴とも見られて、前髮垂げし額の品善く、餅氣離れて眉優しく、玲瓏せる眼元は、愛嬌凝りて、天眞流露せり。誠に、村落に儔卒なる花嫁ぞと、嫉妬深き老媼にまでも、謳ひ囃され、常花の通る門邊には、俟受けて舌鼓うち、笑める顏面眺めて樂しむ、喚衆もありしとかや。

渚の堤に筍ねし常盤木に、濱風通ひて籟を發し、龍吟傾く耳に清く、小石を洗ふ水流の、咽くに似たる潺湲の聲、仙境かとも疑はるゝ、非本家が菩提寺の裏門。朱塗の樓臺、朽ち傾きて、蜘蛛の網を營むに任せ、續きし小杉の生籬、透間を漏れて、墓碑の頭に、羽が根憩めし烏一羽二羽、見ゆるも心滑むぞ、幽邃しくも寂莫し。

この生籬の裾を縫ひ歩みて、今しも裏門潛りしれ菊。後に小者は、常花を背負ひて、手に小机と文庫携へたり。

抑も非本家の菩提の寺といへるは、天保年間小田原藩主大久保忠良公の、鷹狩の疲足を、煎茶に嘗はり給はんとて、この寺に立寄らせられし折、時の和尚照池禪師が、お對手なせし點茶の手前、風流の御物語、いとも興を催はされ、自づと譚の熟して、古の英雄豪傑の人物論に移りて、禪師の說くところ、悉く藩主の旨に叶ひ、それよりは、禪師は殿の御傅役と成り、寺も榮え賑ひしが、照池禪師の入寂せし後、今の照尊法師、學識拔群、宏德の聲昂く、やがて諸々の僧侶に仰められて、和尙の排塵をさむかれぬ。

文林

秋眺望　近衛忠熙

わたの原こぎゆく船の帆かげまで
さやかに見ゆる秋のそらかな

湊川懷古　徳大寺實則

たちばなの花ちりしよりみなと川
かぐはしき名ぞ世に流れける

初秋天　高崎正風

白露のひるまはいまだなつながら
すゞしくなりぬ空のみどりの

山初秋　津輕承昭

桐のはをさそひし風の身にしみて
やましたかげも秋みえにけり

故郷月　嵯峨實愛

故郷はのきばの木立しげりわひて
月だにすまずなりにける哉

古郷草花　久我建通

きて歸るひとにまけじと故さとの
萩のにしきはおりいでぬらん

月前琴　諏訪忠元

隈もなき月のひかりに音もすみて
琴のしらべのたかくきこゆる

秋風涼　前田利嗣

いつのまに夏はすぎけん蟬の羽の
たもと涼しきあきのはつかぜ

避暑　佐々木高行

山水のわさきながれもたちよりて
むすべば夏をわすれけるかな

秋旅行　小出粲

みやこへと思へど旅はうきものを
ひなのなが路に秋かぜぞふく

秋里　植松有經

紅葉にもくるひとのなき北嵯峨の

里のあきころさびしかりけれ

秋晴

空すみてふじも筑波もいとちかく
みゆるは秋のあしたなりけり　宮地 嚴夫

初秋

けふまでは何れの窓にかよひけん
立かへりふくこぞのあきかせ　宇野 豊道

初秋荻

荻の葉に今朝より音をたてそめて
あはれ身にしむ秋のはつかせ　曲澤 貞恒

博覽會

みよのためひろひあつめし海山の
眞玉しらたま見つるけふかな　草野 隆道

月夜訪友

うかれきてかたる心のくまなさを
しりてや月もいりがてにする　永石 德文

旅泊月　嶋津 輯子

古郷のたよりもなみにうきねして
しらぬ浦はのつきを見るかな　保科 節子

月前水鷄

月きよみ夜すがらさゝぬ門の戸を
なにゝ水鷄のたゝくなるらむ　小笠原 艶子

水鷄何方

ゆけど／＼聲まだ遠くきこゆなり
いづかたになく水鷄なるらん　伊達 泰子

瞿麥

さらぬだに咲たわみたる撫子の
はなにあしたの露ぞおきける　原田 蒼生子

池梅雨

梅雨にみづますいけのあやめぐさ
たけみじかくも見えわたる哉　三宅 龍子

樹陰螢

螢とぶすぎのはやしのくさがくれ
みづおとすなり川やあるらむ

樹涼納児

ふく風をまつの木かげに立よれば
　こゝは夏なきところなりけり　　諏訪　晴子

蚊遣火

うちなびく一村さとのかやり火の
　けぶりに夏のふかさをぞしる　　田邊和氣子

月の歌の中に

思ひわびながむるそらのうき雲を
　はなれてすめる秋のよのつき　　毎上　壽子

早秋朝

呉竹のひとよのふしをへだてにて
　今朝は涼しきわきさかぜぞ吹く　　彦坂　尊子

里秋夕

露けさは草木のみかはわがそでも
　なにれとらめや秋のゆふぐれ　　同

閑居荻

世のちりも吹拂ひてよそよの戸に
　　安東　菊子

そよ〳〵かよふをぎのうは風

竹林夏月

風かよふ竹のはやしのつきかげは
　なつさへさむき心ちこそすれ　　内田遊喜子

野分

女郎花はなのひもとくあきの野ぞ
　野分のかせもこゝろして吹け　　太田　貞子

深夜虫

ふけ渡る夜はの鐘のねたえてのち
　かぞへもはてぬむしの聲かな　　市川　柳子

十五夜

今霄とてきえいそくらし浮ぐもゝ
　なだるゝ月のくまにならじと　　曲澤　翠香

女鑑によせてよめる

をしへぐさかずはあれども朝夕に
　おのがかゞみと見るは此ふみ　　高井　孟子

水邊に暑を避く　林　甕臣

「然りとも、川べには」。と風たづねて、柳の、並みたてる木陰に立ちよりたるに、枝おし垂れて、葉ずゑ搖れだにもせず。暑き日にも、在りけるかな。堤の上に繋ぎすてたる牛、齝打ち嚙み、舌長う垂らし喘ぎつゝ横たはり臥したる、さながら息も、絶え〴〵なる者の如し。傍へに牛飼ひわらはも、汗あえて、打ち睡れり。

暑し〳〵　あつし〳〵な　暑し〳〵
あつし〳〵も　暑し〳〵な

川づら、打ち見わたせど、水あせて、瀬三すぢ四すぢに、せゝらぎ流る。さすがに水音すみて、清く涼し。

氷るうへに　霰たばしりし　冬川も
おなじ瀬なりな　鮎子さばしる

柳にも見えぬ暑き日の　川風は
水のながれに　見ゆるなりけり

虫の説　鹽井ふく子

長き夜のねざめの友ともなれとて、近きわたりの草叢にて、いろ〳〵の虫をあつめ來て、軒端なる萩薄植ゑちらしたるが中に放ちぬ。さて夜もすがらさまざまの聲して、鳴き亂だるゝに、何となくうら悲しく、かかれとは思はざりけるものの、なか〳〵に淋しさの增りゆく心地して、露まどろみもせず、あかす夜のみ多くなりぬ。あけても、なほをり〳〵は、かなげなる音を洩らすに、彼は忍ぶとすれど、しのびかねたる音にてかと、いよいよ悲しく思はるゝにつけても、思ひ出さるゝは、日來むつまじき友の事なり、秋なれどとて、彼の友どちと共にあらで、かばかりに、心細くはながらまし、誠にわが身ひとつの秋とは覺えまじものをと思ひしかど、

みやこにはあはれも知らじ松虫の
一夜をこゝらなきあかすとも

といひ遣りしに、流石にむつまじき友、うれしや、ろの日の夕べとも遅れず、三人までうち連れ、秋の野に人まつ虫の聲すなり、われかとはむいざいざなどいひ興じつゝ訪ひたり。いとゞ嬉れしくて、走り出で忙しく迎へなどする程もなく、日は暮れ果てゝ、人のけはひもしづまりたりと覺ゆるに、轡虫といふ虫の、やがて鳴き出だしぬ。あながまあながま、此の虫のみに、かばかりにかしがましくなきわめかれては、こと虫のあはれなる音は、絶えてきこえじ。彼を捨て給はずやと、一人いひ出づれど、それもしか思ふなり、妾もさ覺えぬ、とく捨て給へなど、人々していはるゝに、誰れも人の心は變らざりけり、さらば捨てむとて、女の童して、ほど遠き野末へと棄さりぬ。人も虫もうるさきは、かくこそいとはるゝものなれなど、物語りつゝ、夜もやうやう深くなるまゝに、松虫、鈴虫、蟋蟀、機織虫などいふ虫の入り亂れ、をかしげに、やさしげに、すゞしげに、かなしげに、わびしげに、はた苦しげに、さまざまなる音して、よびつ、鳴きつ、歌ひつ、かこちつするに、草の庵の夜寒むも、思ひ知られてにや、人々悲しうなりて衣の袖しぼりなどす。いでひとりぬる夜の床は、かばかりの事かは。あはれとおぼさむ、招かでも折り折りはなど、怨みきこゆる程に、ながしといふ夜も、いと短くて、いつしか東の窓わかうなりぬ。さて一人の友の云ふやう夜一夜と父母に告げて来しなれど、あまりに遅くれては、家にやものせばされむ、日もはや高くなりたり、いざまかでてむ、さるにても、兼ねて我を待つとかほのめかしたる虫、よべ終夜きゝしに、いとゞあはれの身に染みわたりて覺ゆなり、のう、今より彼れをぞたまはりたし、宿をも共にし、れきふしに慰さめむと思ふにこそといふ。さては又まつよしを云はむに、便り惡くとは思へど、二ッなき友

が頼みきこゆるを、いなまむも心なげにて、秋はつるとも捨てだになし玉はずむ、兎も角もといふに、連れ立ちたる一人の友は膝すりよせ、をかしき事をきこゆるやう侍れど、我兄の子なるが、此の頃夏ばしと云ふものにてなやみ居りぬ。何をかなよき藥よと思へるに、人の物語りをきゝしに、きり〴〵すと云ふ虫かふときは、とみに癒ゆるとか聞ゝ侍りぬ。いと惜しとは思召されむが、まげてとらせ玉へと云ふに、をかしと笑ふ人もあり、妾もそは聞きし事なりなどいふもあり、かゝるやぶなるが、病にやくも立つ道ありとは、うれしき事や、何の惜しからん、疾く連れ行き給へと云へど、又一人、おのれかくふりはへてこしかひに、かの冷しげにふりいでゝ鳴く鈴蟲とらせ給へと云ふ。殘るは唯機織虫のみ。汝のみは、何時までも草の庵の者よとて、うち詠めしに、殘りたる一人の友、つく〴〵とながめ居たるが、貧しき者は、とつぐ事のおそしとは、うべもいひしものかな、己れには其の蟲とらせ給へ、終夜きり〴〵と、くだまく音のいと哀れなる。連れゆきて、都の人にきかせむ。そは難有おん心や、必ず見捨給ふな、こや機織、なれも今より都に人の伴れさせ給ふなり。よしや都馴るゝとも、蓬のもとに住みにし事をな忘れそとて、おの〳〵とり出でゝ、籠に入れなどするに、如何にかしけむ、彼の松蟲のみは姿見えず、萩のたもと、尾花の袖、ひきさやかして、頻りに尋ねたれど、遂に見えず。あな憎くや、誰をまつ蟲にかありけむ。今日は是非なし、また我をまつ蟲あらむ、捕らへおきてよとて、友なる人は、しほ〳〵として、いざとて、歸り行きけるが、夕べはまた松蟲のねのみ變らず草の庵に。

百花園の秋草　　永石德文

秋の野べにさきにはへる千草の花の何はあれど

も、かのむかし山の上の憶良の大人が、めでたまひし七草の花にはしかじ。そのよみいでられたるうた、

秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花。
芽之花、乎花葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、
・朝貌之花。(万葉集巻八)

さて野に山に、おのかじゝ、さきをゝれるはしらず。もゝしきの都のもとに、この千草をうつしうゑて、おほしたてたる園の何てはあれど、すみだ川のほとりなる寺嶋の里、白ひげの森かげちかき百花園には如かじ。又の名を花やしきともはた梅やしきともいふ。今の園の主人佐平が四代のおやなる菊塢といへる人この道に心いたりふかくして、草といふ草、花といふ花のかぎりをとりあつめて、文化のころやう〳〵園をなせりきとなん。されど園の中におほしたてたる草木、春秋夏冬のものすべて七百廿種。四の季いつも花のにほひたゆる時なく、都ひなのみやびをこのめる人々、たかきひききをいはず、杖をひくものども亦たゆることなし。そのゝしつらひいとみやびかにして、屋根は茅草をふき、垣には柴を結ひたるなど万文化のむかしにかはらずとなん。春の梅はあれど、秋の草花はことにすぐれたるものにて、なまめき立てるをみなへしのらうたげなる、ちりもすゑじと養ひ立てけん撫子の花のうつくしき、葛かづらの花のむらさきの色こき、誰がぬぎかけしといひけん藤ばかまのねならぬにほひ、あるは日かげをまたぬ朝かほの花には人の世のはかなきをかこち、露にしなひたる萩が花づまには、遠き宮城野に思をはせ、尾の上のさ小鹿今かなくらん。ほに出し尾花が袖は誰をかまねくらんなどおぼえて、とり〴〵にをかしく、何れゆかしからぬはなし。この七草をはじめて、なほ千草五百草數もしらず、色をあらそひ、にほひをきほへるなどそのねんいふべからず。

朝はまだきより日のかたぶくまで見もてあそべどもいつかはあくべき、はては家ぢをも忘れつべし。ことに朝つゆにしなひたるさまなどは限なくをかし、百花園の名實にむなしからずなん。菊塢がものせられし文いまなほ家にのこれるは、春野七草考、秋野七草考、群芳暦、都鳥考、角田川遊覽記。庵にてものすなる萩が花づま、すみだ川やきなどもゆかし。

おのれ川の流れ一すぢをへだてたる橋場の里に年まねくすぐしゝかど、春は鶯にさきだちて梅の下かげにあくがれ、秋は虫の音におくれずして、千草の花の上におきあまれる露のしづくをむすび、夏は蓮葉の花のにほひにゑい、あさがほの花のつゆのまの命ををしみ、冬は枯野のさまのあさましきに物のあはれをしぬびつゝ、いつとはいはずたゞいとまあれど、ゆきとぶらひつゝぞひとの園ともおぼゑざりける。さるをことしは夏の初のころよりゑさらぬことのありて、すこしへだゝりたるところに移りすみぬるのみか、かてゝいとまとてもなかりしかど、ゑしもとはですぐしつるを、ふとおもひ立ちてとひぬ。園の主人まづいはく、今年ばかり秋草の花の生立よき年はあらず、まづとていざなふ。實に高さ一丈ばかりにあまり、色も香もなべてならず。さくべくもあらぬ花の時しらずまだきもにほひ出たるなどことにあかずをかしく。深く生ひしげれる草むらになきしきる虫の音さへ限りなくゆかしきに、こぞの秋まで、ともにみてし人の今はなき世の人になりたまへるを今思ひ出でぬるに、主人もこの花のさかりをかの人にもみせてしかなどいはるゝに、ありし世のことどもなど何くれと打しぬびつゝ、日も傾きぬるまで聽耽りて、草の葉ごとにおける夕露にこれならぬ我衣手さへもしとゞになん打濕りたる。

雜報

●皇后陛下御令旨　去月三十日、天皇　皇后兩陛下より、樺山臺灣總督に、勅語幷に令旨を下し賜せられたり。大御心の御ほどかしこき限りにころ。

令旨

臺灣總督部下の諸團隊臺灣府及彰化縣の賊徒を掃蕩したる趣　皇后陛下聞し食され頗る御滿悅將校下士卒の忠勇を深く御感賞殊に炎暑の候其勤務を苦勞に思し召さるゝ旨御沙汰あらせられたり

●皇太子殿下の御不例　殿下にはさいつころよりみやまひにみやぐさみまし、高輪の御殿にて御療養あらせ給ふ。かしこかれども、みやまひはしも秋の夜のさやけき月を見るが如く、春のあはゆきの朝日のかげにきえうすることの如く、すみやけくいえまして、すくよけきもとの大御身となりまさんことを、たゞあしたゆふべとなく、こひねぎまつるになん。

●高輪御殿御見舞　皇太子殿下御不例に亘らせ給へど、畏くも天皇、皇太后、皇后三陛下には、深く大御心を痛ませ給ひ、侍從女官等をして、日日御見舞あらせられ、種々の物品を御贈進遊ばさせらると承る。

●東宮殿下御平癒御祈禱　神戸湊川神社にては去る二十四日より二十六日迄、越前國敦賀港官幣大社、氣比神宮にては、去る二十五日、又神道本局にては、去る二十九日、御病氣御平癒の御祈禱を奉仕せりときく。

●早田中隊長敵旗を神廟に献ず　近衛師團、第一聯隊、第七中隊長早田滿鄕氏は、臺灣三角湧大姑陷の役にて、劉永福麾下精兵の所持せしといふ中央に恭迎聖傷と記るし、左端には、鳥坭堀永福莊來利坑衆弟子誠心敬立とかきたる旗をうぞひと

りて、今勝を制して、此の一旗を得、洵に天祐といふべし、願はくは紀念の爲め、神廟に納むるを得んとて、神宮教布教使甲斐山口の兩氏にかたりて、自ら其理由を附記して、献納方を依托せりといふ。其書にいへる、

明治廿八月七月十五日、於臺灣島大姑陷北方約四千米突之高地激戰中獲之、後五日還臺北也、神宮使甲斐山口之兩氏來訪、因献神廟、以爲永遠之紀念、

近衛歩兵第一聯隊第七中隊長
早田滿鄕

●基隆土民嘉禾を神廟に捧ぐ　いにし六月二十七日、近衛師團司令部の臺南に進撃するや、神宮使甲斐權大教正亦之に從ひて基隆まで進行せしに、時恰も初期の稻秀いでゝ、累々穂は長く畔の外に溢るを見て、我國極南の嘉禾、土民をして之を神廟に奉献せしめんと、一片の告諭文を作りて、與へたるに、土民は感喜して其十數莖を取て、之に答書を添へて基隆支廳に納めたり、憲兵大尉上原尚英氏、之を見て、こは他人の手に附せんは、汚瀆の愁ありとて、乾上より、荷作にいたるまで、自ら其勞を取り、甲斐氏が歸朝拔錨の日を待て、渡されたり。其莖長さ五尺二寸、穂は一尺二寸八分ありといへり。

●大坂高等女學校規則の改正　大坂市立高等女學校は、今回、文部省の規程に從ひて從前の規則に改正を加へ、去る九月一日より施行する事となれり。其は豫科を廢して本科の修業年限を六箇年となし、又手藝部を技藝專修科とし、且別に補習科を置き、總定員を七百五十名に增加すべしときく。

●誤り易き語　こは大槻文彥氏の談話なりとて宮城教育雜誌に見えたるを、いとよく弊に當れゝど、とりてのせつ。

白晳（はくせき）二字にてしろき義なり、これを晳の字と心得て、はくてつと讀むは誤。

容喙(ようくわい)　喙の字と心得て、ようたく、たくをいる、などいふは誤。

嬾惰(らんだ)　らいだ、と讀む人あり。注意すべし。

義捐(ぎゑん)棄捐　ぎけん、きけんといふ人あれど、さる音はなし。

破綻(はたん)　はてい、はぢやう、など讀むべからず。

潑剌(はつらつ)　はつし、と讀むは惡し。

絢爛(けんらん)　じゆんらん、といふは惡し。

熱鬧(ねつたう)　ねつし、といふは誤。

避暑(ひよし)　へきしよと讀むは、百姓讀なり。

軒輊(けんち)　けんてつ、と讀むは惡し。

計畫(けいくわく)　けいぐわ、といふ人あれど、ぐわ、と讀むときは、繪の事となる、計る意のときは、くわくなり。

發起人(ほつきにん)　はつき、といふ人多し。されど古來呉音にて、ほつ、と讀むが慣例なり。

祇候(しこう)　麝香間祇候などは、示偏に、氏の下に、一の字ありて、し、の音なり。神祇(氏の下に一の字なし)の字と、心得て、ぎこうと、振假名などするは、誤りなり。

倜儻(てきたう)　ちうたう、と讀む人あり、注意すべし。

運搬　搬の字、移す心なるときは、俗用にてやはり、音は般なり、これを正音にしゆく、など讀む人は、角を矯めて、牛を殺すことゝなる。

模造　模の字は、木偏にして、型なり。形を寫して、作るなり。手偏の模の字と誤る人多し。手偏なるは、捫也。とありて指にて索くることゝなる。

●下田歌子女史　去る二十六年九月、兩　陛下の思召を以て、女子教育取調の爲、歐米各國へ差遣せれし華族女學校教授下田歌子氏は、隨行員堀

江義子氏と共に、さきごろ無事歸朝せられ、去月二十八日華族女學校學監に任ぜられたり。すぎこし昔は世の人みなしらざるはなかるべし、今よりゆくさきのほど、いかばかりいみじからん、西か東かはた。

●なずらへ歌　　三重縣三重郡川島村に稻垣何子といへるをみなすめり。思ふことやありけん。口すさみて、

　きくの花れもはぬ方ににほふなり
　　またなかつきの秋はとはきを

よみもてわぢはへど、ねしらずをかし、心あるに似たりけり。

●子守學校　　信州上伊那郡中箕輪守木下にては昨年十二月、木下子守學校といへるを設立し、太田淺太郎、其任に當り、唐澤定次郎、三澤大象、城取質次郎、北城金三郎の諸氏、後見として、盡力さるゝに、追々盛大に趣くよし、今其規則を得たれど

木下子守學校概則

一、本校は小學々齡中就學猶豫を認可せられし女子にして現に子守に從事し居る者に限り教授す

一、教室以外に於ける管理は通常小學校生徒と同一の取扱をなさゝるものとす

一、教授學科は修身唱歌讀書算術とす

一、無等級とす

一、土曜日の午後及び日曜日に課す

一、生徒須要の道具類は一切貸附す

一、教授者世話人等は總て無報酬とす

一、凡ての經費は當分義捐金を以てす

●聞くなかれ、見るなかれ。　婦人弘道會叢誌第十一號に、米國在住の或人より送り來されし女子に關せる同國雜誌に記載したる同國婦人等の近況なりとて、掲載せるを見るに、「米國にては、女

子の撰擧權を得む爲めに、諸所へ會合し、又は演説會をひらきて、同意を求むるに盡力せるに狂氣の如き有樣なるが、同國の女子は概ね夫々男子の爲せる職業をも爲し得らるゝ故に、男子と同じ、撰擧權を得むと望むなりとか」といへる事見えたり。何等の弊風ぞ、何等の醜俗ぞ。外ながらふびんにおぼゆる夷風、嘆息に堪へざるの魔界。あはれ日本婦人たらむ者は、ゆめかゝる事を見るべからず、きくべからず。

●女子の高等教育主張者に申す　此頃女子の高等教育を、頻りに主張する一種の教育家あり。其のいふ所を見るに、女子は大にしては國家の母たるべき者なり、小にしては家庭の母たる者なり。宜敷高等教育をうけて、高等なる學科知識を學ばざるべからずといふ。こはなほ論あるべし。然れども、又曰く、女子が高等教育は、女子の身體を害し、女子の生命を短ならしめ、女子が身體を薄弱ならしむるとて、これを恐るゝ人あれど、決してさる弊害ある事なし、曰く大學の醫院に婦人患者を統計するに、高等教育を受けたる婦人反て患者に少なし。曰く男子と共に高等教育をうけたる米國の婦人を統計するに、又皆健康なるを證せり。されど、高等教育、何ぞ女子の身体に害あらむや。高等教育必ず女子に施すべしと、斯の如く論ずるやの教育家あり。御親切なる御統計は、實に御苦勞さまと申すより外なき事に御坐候。されど、吾人が密に女子に高等教育をあやぶむの點は、高等教育をうけたる女子の道德の、反て下等なるが如く、又良人に對して柔和順良ならざるが如く又家庭の注意、反て至らざるものある如き感あるに在り、この點は如何に候か、謹で御統計あらむ事を乞ふ。

●榊博士を煩はさむ　平生狂氣の如く獨立とか自由とか同權とか神聖とかいふ事を主張する人が

一種の山師の如き人物の奴隷なり奴僕なりとなして、これを祀りこれを賽し、これを抱きこれを崇め、以て得意然たるあり、精神の病める者に非ずして何ぞや。故に、榊先生を煩はして、巣鴨の病室を借りやらむと存ずるなり。

●女教師の渡韓　朝鮮の京城小學校にては、今回大坂府女子師範學校卒業生なる木村佐史惠女史を聘用し、専ら裁縫の教授を擔任せしむるといふ。同女史は東京にて裁縫科を練習せし人の由なれど同校の該科に上進を與ふるは、勿論。同校に設置しある裁縫專脩科の如きも、次第に入學者を增すに至らむとて、望みを屬するもの少からずと彼の地の通信に見ゆ。(婦女雜誌)

●日本留學朝鮮婦人　三田慶應義塾に留學の目的にて、今回日本に渡來したる、朝鮮學部協辨尹致昊氏の夫人(二十)、令妹(十八)は、去月二十九日東京に着せり、慶應義塾にてはこの日新橋まで人をやりて出迎けるが軈て其列車着したれども、朝鮮婦人と見ゆるは一人も見當らざるにいぶかしと思ふほどに、最後に下りくる三人の乘客あり、洋服着けたる紳士体の人と二人の婦人なりけり。婦人は孰も髮は束髮に結て、日本の浴衣に繻珍の丸帶をしめたるに、女學生風なれど此一行ならんかとも思へど紳士の同伴せるも訝しくて且日本服裝にて斯る氣勢も見えず、去りとて此乘客の外に、一人の婦人もあらねど不審ながらに、一行の擧動に注目し居れど下車するやまづプラットホームを普通の往來とや思ひけん、三人は等しく携へたる蝙蝠傘を開き、其樣殊の外異樣なりけるに、其旨を問ひしかど、果して尹氏夫人の一行にてありきとさて彼洋服着けたる紳士体の人は其從者なりしとなん。

●臺灣の日本語學校　臺灣にはもとより一の言語ありて、南北支那語をもても通せざれど、こた

びの征臺のうへにも、なにくれの困難あれども、田中臺北府知事は、速成日本語學校といふをまうけんとて、さきごろ總督府に上申せりといふ、なほ便よきところ〴〵にも、附屬學校をおこし、十五歲以上二十歲以下のものを募集して、官費をもてまなむしめ、卒業したる上は、この島の官廳に、書記官あるは通譯官に用ゐんとすとなり、これを始めとして、言語風俗さては精神まで、あきしまのやまとぶりに、打きたへまほしきことにこそ。さてこの學校の大要は、

一生徒の總員を六十名とし縣下各市より十名乃至二十名の俊才を撰拔し官費を以て修學せしむる事

一年齡は二十歲以上三十歲以下なる事

一鴉片を喫せざる者

一筆算ありて賭博せざる者

●寄書

れこされたるまゝをかゝぬ、いまの世には、うときこともあるべけれども、大かたは心得ともなるべからん。

やつがれ此頃老のつれ〴〵に古き函などさぐり見しにいつの頃のものなりしか古びたる習字手本あり題號に子供早學問とありて敎訓の語のみ是を見て古人も幼童の教育に意を用ひられしを感ずるのあまり寫して貴社に寄す。

福井縣南條郡神山村千福　田中甚兵衛

二十八年八月11日

子供早學問

一皇統一系の君恩は海山より重し
一忠義は人間のあたりまい
一父の恩は山の如く母の恩は海の如し
一親孝行は福德圓滿のもと
一不忠不孝は人面のけだもの
一親の無理は慈悲より出づ
一子を愛するほどに親につかへ
一誠は寶のあつまり所
一名聞ははりこの虎の如し
一こび吊は其家長久の證據
一慈悲は諸善の基本
一慈悲しらずは身しらず
一非道の金持は三ツ子に花を持せし如し
一ゑまつは冥加を恐る人
一足る事を知るが福人
一小事は大事のもと

一惡事を教ゆる人は無分別のおかしら
一正直は其身のたから
一讀み書は善き道の案内者
一自まんは智惠のゆきあたり
一人をうらむはおとろへの下知
一短氣は其身をほろぼす腹切がたな
一堪忍のならぬは心の掃除の足らぬゆへ
一かんにんは一生の守り本尊
一妬みは其身の仇かたき
一人を惡敷思ふは身ひいきの強きゆへ
一我まんはこぶしのあたり所
一喧嘩口論は後悔のもと
一負きらひは狼藉者の大將
一家内けん嘩は貧乏の種まき
一かない和合は福の神の御祭り
一稼ぎに近付貧乏なし
一しんぼうは物を成就す
一商人は賣先買先は父母の如し
一かすりとりは罪科のはきだめ
一わざわひは酒と色より出づ
一遊興を勸むる人に近付べからず
一流行好みは心の内のよごれし看板
一奢るものゝ末は世上のやくかい
一不相應の樂しみは苦しみの先觸
一無益の殺生は短命禍の種まき
一大食は命のとり越し
一小食はなが生のしるし
一博奕は禍と知りて毒をのむが如し
一財寶は未來の貯にならず
一あきらめは人の養生
一善き金持は陰德のむくい
一陰德を積んで子孫のためをはかれ
一善人は五常のかゞみ

こは子孫のためともならばやとて或老人の認められしといふをやつがれの幼年の頃かりて寫し置くものなり云々●

●新女學士二人　神戸なる英和女學校卒業生塚本ふぢ子、雨屋ひさ子は、久しく米國にありて、學びしがこのごろ女子大學を、亦明治女學校卒業生坂本なつ子は、看護學を卒業して何れも去月の二日、歸朝せりといふ。限りなき大海原を、いたわりて、遠き外國に、女の身ながら、學びすとは、いともけなげなるわざなり、されども、たゞ外國とだにいへばよきものとのみ　思ふはたがへり、よきこともあり、あしきこともあるべし。やよ、この二女史や、いかなる女德をかやしなひ來つらん。

●あさましき文明　げにまことなりせば、いか

にあさましきことならずや、文明々々と自らもはこり人も稱ふめる國にしては、につかはしからず。文明のならはしとは、かゝることをやいふらん。母が母なれど、女も女なり。又婿も婿なり。よくも打ちそろひたる三副對なりといふべし。德操といふものもなく、たゞ浮れはてゝ、きくだにいまはしき限りなり。自ら猿の進化したるなりといふなる國としてはつきぐ〱し。さる新聞紙に、

婚姻は人生の儀式中にて、最も重大の一なる文明國に在りては孰れも同樣なるが、殊に歐米の諸國は婚姻に對する法律宗教の制裁嚴しきが爲め其手續頗る面倒にて互の契約は成立ちても眞正の夫婦となるまでには中々容易の事にあらず隨つて離婚の如きも頗る難事にて一々法庭へ訴へて勝敗を爭ふ次第なれど我國の如く親元の承諾や三行半にて濟むべくもあらず然るに獨り英國に在りては他の大陸諸國と異なり結婚に對する法律宗教の制裁は左程に嚴重ならねど隨つて大陸よりは至極簡便なる法行はれて早々夫婦の契約を成し早々に結婚の式を擧ぐるが如きは余り珍らしからぬ事なるがされとても相當の日數を費し相當の手續を踏むが習ひなり然るに此處に同國人をして一驚を喫せしめたる神速の婚姻こそ現はれたれこは日本の如き婚姻法の容易なる國に在りても隨分稀有なる事なるが今其顛末を記せんに英國某市に住む女俳優一日知人の紹介にて未婚の某紳士と知り三人打連れて散步に出掛けんとせしに其際女俳優は我娘の同伴を乞はんとて自宅より連來り紳士に引合せけるに紳士は娘の美貌なるに(中略)即座に母なる女俳優に對ひ結婚の申込を爲しけるに母も其座に之を承諾したり去ど善は急げとて散步も中止となり紳士は其日直ちに寺院に走りて結婚の手續を爲し又結婚の仕度料とて娘の母より千圓を借り翌日

の正午までに結婚準備を了り同日午後二時寺院にて首尾よく儀式を濟まして夫婦となり二三日を經て紳士は兩親の住家へ新婦を携へ行きしが其際又新婦の母より二千圓を借りしに夫より一週間の後新婦を放逐して離縁の訴を起しぬ其申立は結婚の當時は精神錯亂し居たれど正當の結婚に非ずとの主旨なりしが紳士は後に至り如何に思ひけん該訴訟を取消して元の夫婦となりたるが此度は新婦の母より貸金三千圓を返戻せよとの請求しけるに紳士は大に怒り彼三千圓は元借用したるものなれど全く結婚の爲に費したるものなれど返金するの謂れなしとていつかな返さぬより該金に對し目下双方訴訟中なりと云ふ(中略)文明に伴ふ人情の輕薄歎ずるに堪へたり

●笑ひぐさ　伊豫の國なる松山に、久しくとらはれとなりて、なか〳〵に月日を樂しくすぐしし、支那兵は、このごろおのが國にかへるべききさはまりて、今滊車にのり移らんとしけるを、傍にありし人、たはふれて、今はさすがに名殘のをしまれて、別るゝがかなしきに、といひしかど、支那兵、片言もて「又參ります」

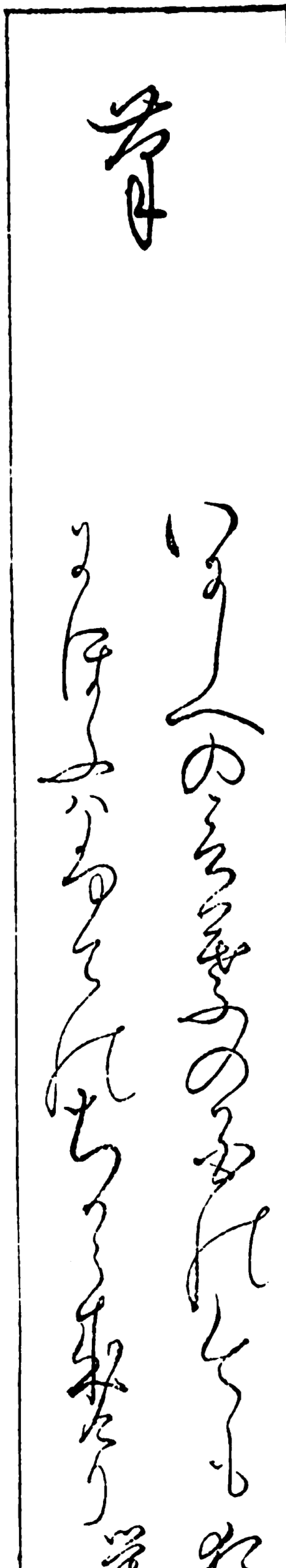
●うらうへ　西藏國人は人にあひて、禮をするに舌を出し。南洋諸島の俗は、われとわが臀をうつときく、地かはれど手ぶりもかはるなりけり。

兼題

九月二十日
歌……祇王
文……秋懷のことど

十月五日
歌……鹿聲幽
文……菊を贈られたるかへし

侯爵 鍋島夫人榮子染筆



教の庭

九月五日兼題 月夜琴聲（天地人のほかは原稿到着順なり）

天 赤坂區一ツ木町八十一番地 川口政子

つま琴の音もおもしろく聞ゆなり
　月もこよひはすみまさりつゝ

地 芝區三田四國町 師岡千代子

み空行く月のかけさへたゆたふと
　おはゆはかりの琴の音ろする

人 下總國海上郡銚子町 岩崎今子

てる月のふけ行くまゝに琴の音の
　しらへも高くすみわたるかな

おもしろき琴のしらへそきこゆなる
　つきすみわたるあきの夜ころに　住山哉子

おほそらの月のかつらもつまことの
　しらへにかよふあきの夜半かな　安井章子

きく人のこゝろもすみてさやけきは
　つきにしらふるをことなりけり　永井さい子

うき雲のかゝれはたゆむことの音は
　つきみかてらのしらへなるらん　丸山須磨子

ことの音にこゝろひかれて月かけの
　かたふくまてになりにけるかな　鈴木美惠子

つきかけのふけ行く夜半の琴の音は
　たれにきけとのしらへなるらん　牧野幸子

琴のねはたか手すさひかしられねとも
つきそこよひのあるしかほなる　牧野こすゑ子

こよひたれふくろもしらてやまと琴
くまなきつきにかきならすらん　牧野さかき子

影きよきつきにしらふることきけは
このよのほかのこゝちこそすれ　牧野さは子

つき清みおきゐなからに夜はふけて
たまのをことの音をもきくかな　牧野とき子

ことの音も空行くつきもすみてけり
あはれすみよき夜半にもある哉　進藤かね子

影きよきこよひのつきをわかみると
しりてやきみかことの音そする　進藤すゞ子

月もなほすみやまさらんさゝかにの
いともたへなることのしらへに　進藤もと子

ゆふ月のかけおちかゝるそてかきの
すけきもりくることのさやけき　佐々有鄰子

松かせのしらへにかよふことの音に
つきもことさらかけそさやけき　諏訪晴子

大そらのつきのかゝみのさやけきに
たかやとならんことの音のする　香川頴子

玉たれの小すよりもるゝことの音は
つきみかてらのすさひなるらん　舘脇ます子

いねかてのたか手すさひの業ならん
つきの夜すからひゝくことの音　諸井くら子

ことの音の絶ゐはるかにきこゆるは
つきみるひとのすさひなるらん　池谷むら子

われのみと月みるそらにきこゆなり
たかつまことのしらへなるらん　杉浦いと子

松かせのおとにもかよふことのねの
しらへもつきもすみわたりけり　伊賀直子

さ夜ふけて空にさえゆくことの音は
つきにこゑあるこゝちこそすれ　吾妻ちか子

つきみつゝ人まつ夜半の手すさひか
ねたくもよそにことのきこゆる　山本いと子

月かけにたかしらふらんさ夜ふけて
まつふくかせにことの音そする　磯部つや子

ことのねも月のかつらにかよふかと
おもふはかりにすめるこゑかな　高井謐子

つきかけのさやけきよひは少女子の
ひくことの音もすみわたるなり　堀谷よし子

つき清みわかすむにはのまつかせの
しらへにかよふをちのことのね　堀谷ゝな子

さえわたる月にあはせておもしろや
たかつまことのしらへなるらん　羽田三緒子

ゆかしくも遠くきこゆることのねは
　たがつきみつゝかきならすらん　河田いし子

たまことの音もさえわたる秋のよの
　つきみがてらにきくもたのしき　馬場乙子

月きよみいてゝうたへはおのづから
　しらへあひけりたちのことの音　名取正代子

秋の夜はものおと絶えてすみわたる
　つきにかなつることのねそする　花山保江子

あきのよの月すみわたるたかとのに
　しらへゆかしきことのねそする　花山操子

かきならす糸のしらへのねもすみて
　きくもたのしきゆふつきのやど　井出信子

つまことのしらへを空やめてつらん
　てりまさりたるあきの夜のつき　樋口のぶ子

ことのねにこゝろひかれててる月を
　しばしはよそにあゆみぬるかな　橋本丹江子

ますかゝみかけしと見えし月かけに
　しらへさやけきことのねぞする　佐々ふさ子

ことのねにあきのあはれも打ち忘れ
　おもはすふくるつきの夜半かな　遠山よし江子

てる月のながめゆかしきあきゝよに
　しらへたへなることの音ぞする　遠山たゞ子

よひのまにきゝしより猶さやけきは
　つきにすみゆくさよのことのね　河野文子

すみのぼるつきと共にもなよたけの
　ふしおもしろきことのしらへや　杠秀子

秋の夜のつきにしらふることのねは
　あつま少女のひくにやあるらん　中原眞子

さえわたる月にこゑあるこゝちして
　きくもたへなるやまとことのね　徳永ます子

琴のねにうかれてつきやいてぬらん
　こゝろのくまもはれわたりけり　澤田春子

つれ／＼の友とこそなれ夜もすから
　つまなくさめのことのしらへは　海島信子

すみわたる月のひかりをながめつゝ
　きくもうれしきつまことのこゑ　海島定子

大そらのつきをたよりにかきならす
　ことのしらへやはてなかるらん　太田貞子

小夜ふかみ松ふくかせもしつまりて
　つきにすみゆくつまことのおと　太田さよ子

つきかけのきよきさか野に聞ゆるは
　たがつまことのしらへなるらん　新開みちを子

月きよくまつふくかせのかよふ夜は
　しらへことなるねにそきこゆる　青柳百枝子

久かたのつきにすみゆくことのねに
こゝろひかれぬひとはあらしな　大橋貞子

さやかなる月にしらふることのねに
わかこゝろさへすみわたりけり　青羽茂枝子

ふけぬとも戸さゝて聞んおもしろく
つきにしらふるつまことのこゑ　林久子

なかき夜の月もふけゆくたちかたに
こゝろつくしのことのねそする　林光子

端居してつきにむかへはゆかしくも
いつこなるらんことのねそする　大海原芳子

松かせのしらへにかよふつくしこと
つきのかつらのきみやきくらん　廣野濱子

久かたのつきの夜すからゆかしくも
たかしらふらんつまことのおと　清水信子

すみわたる月にうかれてすさふらん
いつこともなくことのねそする　近山まつ子

よもすから月にしらふることのねは
うきよのほかのこともこそきけ　植木鋼子

なにひとのかきならすらん月かけの
さやけきそらにひゝくことのね　碓井武子

あはれなる琴のしらへやつきの夜の
ふくろもしらてあかしけるかな　碓井わか子

まつ風にかよふしらへのことの音は
つきとともにそすみわたりぬる　碓井信子

いにしへのさか野の奥そしのはるゝ
つきすむ夜半のつまことのこゑ　山内かく子

あきの夜の月にしらふることのねは
こゝろもともにすみわたるなり　山内照子

おもしろきつきにうかれてふく笛に
しらへあはするたちのことのね　吉田芳子

つきかけと共にすみぬることのねに
こゝろもそらにひかれぬるかな　鎌形恒子

つき清みこゝろもすめるつまことは
たれまつ夜半のすさひなるらん　鎌形素子

琴のねのしつみかちにもきこゆなり
月やものおもふたれとなりけん　櫻井花子

かきならす秋のしらへにあまのかは
さわたるつきのかけそすみゆく　千賀しけ子

つき影のふけ行くまゝにきこゆなり
しらへゆかしきつまことのおと　久松せい子

ことのねに月のひかりもそはりけり
さか野のあきはかくやありけん　松田靜枝子

月かけのさやけき夜半のことの音は
そてになみたのかすそへける　松原保子

いとのすさひなるらん小夜ふけて
　つきにしらふるつまことのおと　大津千枝子

さし渡るつきのひかりもことさらに
　見ゆるはかりのことのおとかな　志和池しん子

さしいてし今宵のつきのかけすみて
　むかしこひしきつまことのこゑ　林よし子

琴のねにこゝろひかれてきてみれは
　さやかにてらすあきのよのつき　中村つき子

そゝろにもむかしをそ思ふ琴のねと
　ともにすみゆくあきのよのつき　中村なか子

てる月のかけみるさへもすゝしきに
　まつかせかよふつまことのおと　清水きよ子

たれ人かつきみなからにならすらん
　小夜ふくるまてことのねそする　小野崎とみ子

月の夜のあはれをそへてゆかしきは
　たかつまことのしらへなるらん　松下よし子

いつしかとふけゆくまゝにひく琴の
　ねもすみわたるあきのよのつき　田島ます子

小夜ふけてすみ登りたることのねに
　こゝろひかれてつきもいてけん　廣田とめ子

月よしとともかりとへはたれならん
　いともゆかしきことのねそする　青木春子

夜もすからことのねきよく聞ゆなり
　つきにねられぬひとやひくらん　毛受重子

木のまもるこゝろつくしの月かけに
　たかつまことかよたゝしらふる　市川柳子

月わたるくもゐにすめることのねや
　あまつをとめのすさひなるらん　曲澤秋香子

久かたのくもゐにすめることのねは
　つきのみやこにたかしらふらん　曲澤ひて子

をとめこかひきなす琴のたへなれは
　あはれとつきもてらすなるらん　遊佐とよ子

月みつゝたかすさふらんよもきふに
　しらへゆかしきつまことのこゑ　中村芳尾子

月のよにたかしらへにやつまことの
　こゑもゆかしきしをりとのうち　坂本乙子

ありあけの月にこゝろをうつしつゝ
　たかつまことのしらへなるなん　竹村竹里子

つき影のくまなくすめるしのはらの
　おくにゆかしきことのねそする　村田き代子

つまことのこゑそゆかしき庭まつの
　こすゑにつきはすみわたりつゝ　村田美都留子

てる月にこゝろうかれてはしゐせは
　いつこともなくことの音そする　竹村琴子

てる月のひかりにそへてたのしきは
　しらへゆかしきつまことのおと
内田たけ子

端居してつきみる夜半のたのしさを
　そへつゝことのおとろきこゆる
内田はる子

雲のうへに月すみわたる夜もすから
　かきなすことをゆかしとろきく
田中りん子

かきならす端半のつま琴おとすみて
　つきにふけゆくまつかせのこゑ
小野谷りに子

九月五日兼題　秋草を見る記

天　長野縣長野町八百四番内一　吉田芳子

みとりなる一つ草とる春はみしといひれきけん秋の千草の花はかりめてたきはなし今日しも學ひの友三人四人たつねきてこの八千草の花のさかりをむなしく秋霧にのみ立ちへたてんも口惜しいさ之よりとろ丶のかされ垣ねの朝かほの花のしをる丶頭宿を立ち出てぬますはのす丶きのはにいて丶打ちまねくま丶に野邊にいたれは何をかこちてか恨みかはなる葛花匂ひこよなくて袖ふれなはうつりもしつへき藤はかまうしろめたけにたてる女郎花さては枝もたわ丶にさきみてる萩か花夏のてる日にたへ秋の露をへ霜枯の野邊にもさきのこれるへきなてしこなと何れもをかしからぬはなしこのはか名もしらぬ草ともとり〳〵にさきにほひたれはなほ奥ふかく分け入らむとれもふ折から夕日影端山におちて夕月のほのめき渡るに草はの露虫の聲に一しほ哀をそへて殘りをしくは覺ゆれとも又の日をちきりて家路につきぬ

地　山梨縣甲府山田町　名取正代

降りつ丶きたる時雨のあめの今朝はなこりなくはれわたりてはなやかに朝日さしのほりやう〳〵秋のけはひ立つま丶にけふはしも久しうたれこめてふたかりたる心のうさをはらさはやと常にしたしめる友垣二たり三たりしてそれの花やしき見んとていてゆきぬ道すから野邊のけしきを見わたせはろこはかとなく百千々の草花咲亂れたりか丶れは花やしきもさころとれもひやられてかひ〳〵しく

そすゝみゆくやかていたれは實にれもひしにもましてひろやかなる園生は端のはしまていさゝかのちりもれかしとかきはらひて心のまゝに茂り合ふ野邊なとのものにくらふれは一きはうつくしうてひたすら目をよろこはしむまつこなたには朝顔のいろ／＼をはしめ玉萩糸萩の枝もたわゝに露れもけなるもあはれにてかなたにはいとなまめかしき姿の女郎花たけ高く立てるに某僧正の昔も志のはるる花薄はほにいてゝ風のまに／＼こん人をまねき桔梗の花の小紫は床しき色に咲亂れまかきにゝほふ藤はかま風にみたるゝかるかやをはしめいと愛らしき撫子ろのほかむかし憶良かねらひし七種ならぬ八千草の花ことに名をきゝてもなか／＼にねれはゆへうもあらすされはたゝうつくしめてたしとのみいひてすきゆけとも其數さはにきはひたてるさまはいつれとりまさりもわかすなんたゝたゝてゝかしこの國々より織り出したるあやにしきの品くらへなんかくやわらんなといひつゝさまよひあるくほとにれのかあやしき衣の袖までもいつかめてたきにほひうつろひてさなからにしききたらん心地せらるゝもうれしとやかくやとめてあひつゝ時のうつるをもれはねすふと見れは日正に午に及はんとするにれところきて家路たとりぬ

人

長野縣東筑摩郡廣丘村七番　太田さだ子

霞立つ春の野面に打ち出てゝはあはれとよひ櫻さく春の山邊にあくかれては實にとめてゝひたすらに春の景色を祉よしといふめれと尙秋きりの絶ねたねにはのめく千草の錦もいとあはれなり一ゝ夕暮のをかしきにもよほされてろこはかとなくさまよひ行きしにいつしか打ちまねく尾花にひかれて行くとしもなく野邊に出てぬこのもかのもにさきみちたる秋の枝もたわゝなるに夕風のさと吹きわたりて葉末の露のこほれあふさまいとらうたし男鹿の妻ともいへはさるかたに戀しさもまさりてなん女郎花の艶になまめける女のたゝすまひにもたくへつへし桔梗の頭かたむけて物思ふ顏なそもま

たをかし刈萱の亂るみたれ易けなる仇し心と歌はれむもことわりなり脊子か着ならしの名にちなまたる藤袴もきて見る人の多けれと中〳〵にねたけなりや野菊のやつれかはなるもませかきに移し植うる人のなけれは世の頼みなきをかこちてにやあらむ撫子といふものいと〻なつかし唐といふもうつくしけれとなは敷島の名に負ふ方ころこよなけれ大方唐といふ名何につけてもこちたしわきて唐うた唐繪なと世に蔓らむはいと心にくしやなとおもふにはや墨染の夕へもふかくふりいて〻なく鈴虫の音におとろかされ我れをまつなる松虫の聲にひかれてかやか軒にそ入りぬる

女郎花なまめくわたり松虫も
待ち出て〻鳴く秋の野邊哉

佐々有暉子

山かたまけるわか庭なれは萩か花尾花なてしこの花女郎花朝顔の花なとは植ゑぬものから今を盛に色あらそへるさま朝な夕なに目に見ねてにふれてあき心ちのせらるるをりから中かきのへたてなき心あひの友達鳥かれとともに出立てかた山かけな音なひつれは見なれし庭はものかはと枝折戸おしあけて朝日の岡のかたへそ秋をつられて逍遥せんとものしける道のゆくてに露になまめく艸花あり一もとをろまに岡のへにつきぬみわたすかきり桔梗かるかやわれもかう花ならぬはなく〳〵姿うるはしう秋のさひしきをもうちわすれて夕日のくたに伏庵にかへりきて友達の歌文をみるみるつたなき筆をとりてひと言かくなし

松田靜枝

見やる限りは千種の花なりおのか春とや思ひけむ露けき秋を競ひて花のかすく〳〵咲き揃ひぬけに暫時は秋草の時代となりぬされとその全盛も只つかの間榮華の夢の覺め易きはあはれ秋草の上はかりおもへは頼みかたなきうき世にこそ

田中りん子

去年の秋は下野國那須野か原にものしつ三里四方も有とかや見渡すかきり尾花の浪打寄するにきらめきたる露の白玉はら〳〵とちり秋風も身にしみていとあはれなりなまめき立る女郎花眞きよつはる葛の葉のはなさては桔梗かるかやおもひのま〻にさ小みたれ秋のにしきを織なしはたおり虫のあやなすもいと興有りにてあつまの都もいにしへはかくや有けんとそのかみも思ひ出てられにき今そのかたみともみつへきは隅田川の片ほとりなる百花園にもあるへきか數しらぬ千草をうゑたれは秋はひとしほ見所有いつれもおなし秋なれと千草の中にうつくしく咲けはこそ人もめてはやし秋の七草とも名け〻め

流行の栞

中尾鶯夢

はしがき

花咲ひ鳥媚ぶる春は、昨日の心地するに、早、風蒸し砂焼くる夏も、わづかに殘んの姿をとゞめて、やがては七草は、笑む根元、哀れに鳴きすだく蟲の聲々、心を痛ましむる頃となりなんかし。かく四季をり／＼のうつりかはるは、一さだめの規道を辿ることなれど、敢へてとかくの言も、むやくに似たり。唯ふしぎにも、人の心に映ひて、四季をり／＼の風俗を異にして、流行といへる感情より浮みしわざの、いきはひまうに、普天の下率土の濱を、あらぶりめぐるぞ、訝かしき沙汰の限りなる。

さはれ、流行のさまの、年々歳々相同じからで、ある時は、むくつけき風の行はれ、また或る時は、かるはづみなる樣に流れ、奢りたかぶる等、千變万化のあれぞこそ、世はいみじかるべけれ。されど、そが風俗の、いかにうつろひかはりて、流行のすがたとなるやを、うかゞひわきまうるは、あながちむだ事にては、あらじかし。況ひて、一家の内を治め、ひいては一國にすら、及ばしなんと思はるゝ、いとも重くいとも深き、つとめに身を鞠り瘁を盡し給はん、女の君たちには、時の流行にあかるくて、そがよしあしのけじめを心得、一家の人々をして、はづかしからず、世にまじらはさんことの、いかにおのが譽なるべき。すべて女の、時の流行にくらき、閫の内を天地となせし、古き代はいざ知らず、人のゆきかひ日に繁く月にはげしき今の時は、こよなき恥辱と、いひつべし。かりに、こゝに、一人の女ありて、そが娘そが妹に　れのづからなる黑髮に、穢らはしくも又いまはしき、馬の髪となんいへるを、そへ加へしめつ、シャグワといへる髪風に、結はしめたりとせん。

しかしてこの女は、あつぱれ娘妹等の姿美はしと、心樂しく思はんが、心ある人のこを見たらんには、何とか思ふべき、つまはぢきなして、笑ひ蔑まざるは、なかんめり。そはこのシャグワといへる髪の風は、もと遊び女のもはら結ひし振りにて、いやしくも又猥りがましきなり。これぞ、流行にうときの罪ならんかし。これさゝやかなる例なれど、その人の品をくだし格をそこなふことの、甚だしきものなり。われのこゝに、一欄をまうけて、流行の栞となし、みちしるべなさんは、ひとへに、女の君たちを、思ひてのわざ、これをや老婆心といふべきか。されど、われいまだ眼鈍く才短かければ、あるひは、あやまち無きをうけがひ得ず。伏してねがはくぞ、大方の君子淑女たち、わが微衷をあはれみ給ひて、をり〳〵文を惠みて、わがあやまちを訂し、わが知らざるを敎へられんかし。かならず、世に益すること、尠なからざるなり。

さて、そがはうべんに、衣類、髪の風、切れ地、裏地、袋物、あるは、かんざし、その他有益なる飾物、新たに珍らしく奇とするに足る仕立ぶり、はき物、帶、ふぞくの品等、くさ〴〵の流行を探りて、そがよしあしを、あげつらひて、またき栞のせめを、つくすべし。こたびは、いまだ準備のととなはざるまゝ、我國古代よりいまに臻るまで、風俗いな風俗の一部なる衣るゐの、變遷をたづね、わづかに一般をしるして、いさゝか、温故知新といへる事の、たよりとなしぬ。

わが身つくろひのうつりかはり

（據皇國史要）

神代。衣服の料に、絹もありたれど、麻、楮などの纖緯にて、織れる布をも用ゐ、倭文織（しづり）とて、筋ある布もありき。男も、女も、あまたの玉を緒に貫き、頸にも手足にも纒ひて、頸玉（くびだま）、手玉（てだま）、足玉（あしだ

ま)、ととなへ、頭にくさ木のえだ葉をさし、又蔓をかけもしたり。

職官の代。(大化より壽永まで)　當時の貴族は、男女のけじめなく、生れし子は、その髪をはふらかして、眉の上のみきり整へたるを、うなゐといひ、その髪の肩のわたりに、たれさがりなば、男は、ひさごわなに結びわげ、初冠の式(うゐかむりのしき)を行へば、頂に結集へて、そのすゑをきり整へたりき。女は、うなゐの髪の長くなれば、帶のわたりにて剪揃へ、夫さだまれば、髮そぎの式(びんそぎのしき)を行ふ、さていよいよ、人の妻となれば、すべらかしとせりとぞ。このころ、男は、おほかた女の家に通ひて、男の家に、婦を迎ふることは、稀なりき。女は、すべて白粉をつけ、燕脂を頬のわたりにぬり、鐵漿もて歯をくろめ、鑷子にて眉を秡去り、黛にて眉をゑがき、夏も、冬も、十二一重(とにひとへ)あるは五つがさね、七つ重(なゝつがさね)などいひて、單の衣を、いくまいも重ね襲ねて、その衣には、唐より渡りし名香をたきしめ、紅の袴のうへに、裳(も)といふを纏ひぬ。男は、鷹狩の時に着る便服を、常の用ゐとして、そを狩襖(かりぎぬ)と稱へ、くゝり緒の袴をはきて、いつも烏帽子をかぶりける。直衣、水干、直垂などは、皆この頃より、始まれる服なるべし。

武家の代。(文治より慶應まで)　鎌倉幕府の頃は、勇武に質朴なる武家の世とて、衣服は、中間、小者などは、布四幅もて作れる、短き袴に、脛巾をまとひ。士人は、官位あるも、なべて烏帽子、直垂を着たりき。公家の人々が、朝服の織紋を、家の徽號とせしより、うつりて、武家にも紋といふものを用ゐ、そを布直垂につけたるもありて、こを俗に、大紋(だいもん)と云へり。武家は、弓

ひく使を謀り、藺にて作り、色革にて飾れる綾藺笠をかぶる。女は、なべて打掛を着、道をゆくには、むしたれきぬつけたる笠をも被れり。關東武士は、鬢の毛を拔き、五味子の汁もて、毛をなでつけ、頂に束ねて、そのさきを、總のやうになしぬ。

降りて足利幕府の頃は、公家武家、ともに直垂にならべて、素襖を常の服となすの風、室町のはじめより行はれしが、武家のうちには、素襖の袖を切捨て、そを肩衣(かたぎぬ)と唱へて、着るものもあり、公家の道ゆく時に着たる、胴服(どうふく)といひしものよりうつりて、はふりと云ふ上着をも、着そめたり。武家は、源平の時代このかた、兜かぶらむに、頭熱しとて、月代(つきしろ)といひて、頂をまろく剃れるものありしが、此の頃になりて、月代剃れるもの、やう／＼多く、後には、前髪をも、髯をも剃去りて、鐵漿にて齒を染むるもありき。女の髮は、なべて「すべらかし」なりしかど、賤しき者は、「つのぐる」といひて、細き白布にて額をまくもありき。東山御殿に仕へし婦女等、事取りまかなふ時に便よしとて、「すべらかし」のさきを綰ねて、髻に結びしより、かたはづしといふ髷をも、結ひそめぬ。女は、なべて絹一幅を、六つむかりに裁ちたるまゝにて、帶となし、他所へ出づる時は、蒙衣(かづき)とて、小袖を頭の上より被り、又は、布を左右へ垂れたる上に、ぬり笠を被りなどして、面をあらはさぬやうしたり。さるべき人は、伽羅の香をたきしめたる衣服を着、兜などに香をこめしもありき。

德川の世にうつり、世の中の階級、士農工商の四つに分れぬ。その他、やんごとなき公家の方方、あるは長袖、又賤しき穢多非人等あり。士のうちには、その主に見ゆべきと、さあらぬ

との間に、いみじきけじめありき。士は多く羽織袴を着、大小の刀を腰にさし、身分の重きは、常に鎗を持たせ、公の勤には、肩衣を着、儀式の時には、熨斗目の小袖に、麻の上下を着たり、幕府の禮服は、位官高きは直垂、狩衣、大紋を着、五位より下の人は、布衣、平士は素襖を着用し、いづれも烏帽子を被りぬ。武家の婦女は、常には袿のみなれど、大禮には、袴をも着けにき。平民も重き式には、麻の上下を着用し、通常の禮には、紋つけたる羽織に、袴をはきたり。苗字をよび刀佩ぶることは、士に限りしを以て、町人百姓にて、苗字帯刀の許をうくるは、いと面目を施すことなりき。公家と僧と醫とのほかは、男はおほむね、月代の前を剃り、髪を頂に集めて、髷に結ひ、後にはなべて、髭をも剃去りてき。女の髪は、秀吉の頃より、筋髷、唐輪などに結べるものありしが、徳川の世になりては、おほかた、髷を結ぶ風となり、油を用ゐ、櫛、笄などをも、髪の飾とせり。されど、他へ往く時には、塗笠、又は綿帽子などをかぶり、貴女は、蒙衣を着て、面をあらはさゞりしに、日傘といふもの行はれしより、髷の形もとみに改まり、簪さすことなども始まりて、面見するを耻ぢぬやうになれりき。男女ともに用ゐたる革の足袋は、いつか木綿とかはり、鞜

金剛、板金剛も、はやく雪踏となり、桐下駄、駒下駄とかはりぬ。又戰國の季より、徳川のはじめへかけては、さるべき人の女も、手作りの帷子一枚を、三年も四年も着古し、から絲の丸うちにしたる紐を、幾重ともなく卷並べ、こを名護屋帯とて、いとはな〴〵しく思へりしを、いつの程にか、絹の幅のまゝなる帯を、ひき結び、髪あげに用ゐしさねかづらの汁は、伽羅油となりかはり、縮緬の衣すら、常着とするやうにな

り、一の櫛、簪買はむ費は、米幾俵にかへつべくなりかはりぬる。

織物は、豐太閤が亂を避けし織工を、西陣へ呼還し、明の工人に、絹織らしめなどせしより、繻子、紋紗、錦襴、縮緬などをも織りいで、二千三百年代のはじめつがた、京より羽二重（はぶたへ）、郡内より海氣（かいき）をいだし、後百年ほどを經、桐生の石田九彌、花形ある絹、かうもむなど織りそめぬ。綿布は、豐太閤の時、薩摩より織りいづるを、はじめにて、名品國々よりいで〻、楮布、葛布、質布などは廢れ、麻布さへ夏の料となりにき。又、小倉織、薩摩絣、結城縞なども、できにたりける。

さてやがては、今のさまに、うつりしなれ。

今の髮の形（一）

髮の形は、しゆ〴〵さま〴〵ありて、高尙き鄙賤き、しな〴〵につきて、けじめありき。あるはけだかく、あるはなまめかしく、あるはいやしく、あるはみだりがましき等、いち〴〵あげつらひをらんには、夜を晨に繼ぎぬるとも、つきせざるべし。近年流行せる髮の形は、島田、丸髷、も〻われ、とんぼ、銀杏がへし、しやぐわ、みつわ、てんじんわげ、れたでこぼん、束髮等あり。

島田は、見る目に、意氣と思はる。近くぞ、藝者あるは妖婦の、結ひしものなれど、見る目に飽かで、厭味すくなく、臈闌けき裡に、優しきさまのこもれる。いまは、やんごとなき姫たちより、賤しき唄ひ女はいはずもあれ、料理店の女中等、もはら結ひぬ。されど、島田にもさま〴〵ありて、文金島田、高島田、並島田等あり。文金島田は、重に令孃等に行はる、金糸、むらさき、も〻いろ、しろ等の、房根がけをかけたる、けだかくて艶めかし。（島田のこと、いまだつきじ）

きて相議り、其の事を成就せしむる様に、勉むべし。一時の諾否を重んじ、須臾の議論に勝ちて、愉快とし、事の成否を顧みざるは、愚なる人なり。共に朋友として交るに足らず。

平兼盛

世の中に嬉しきものは思ふどち花見て暮す心なりけり

一首の意は、世の中には、種々樣々に面白く樂しく嬉しき事はあれども、其の中にて尤嬉しきものは、心のあひたる朋友と相對して、物思ふこともなく、心のどかに春の花をながめ、終日快々として暮す心なり。此の心より外に勝りて樂しきものはなきものぞとなり。

千萬の思を胸にたゝへ、無量の感慨を心に持たむ、春の花ものどけかるまじ。秋の紅葉も樂しかるまじ。萬の物は、常に樂しく面白きものなるべけれども、心鬱鬱として樂まざる時は、返りて憂苦の種ともなりぬべし。故に心の作用によりては、萬の物、樂しくも悲しくもなるものなり。而して、其の心の平かなる時、樂しと思ふ事には種々あり。然れども、心のあへる朋友と共に、花見る心より、樂

しき心はなかるべし。何となれば、朋友と相向ひたる時は、さらぬだに樂しく嬉しく思ふものなるに、まして春の花のにほひのどけきを眺めたらむには、如何ばかり樂しきものならむ。此實に朋友の眞情なり。

大納言師兼

君の爲民の爲ぞと思はずは雪もはたるも何かあつめむ

雪も螢もとは、雪を集め螢を集めて、學問を勉强することにて、必しも雪螢を集めて苦學せずとも、此處にては唯勉學することを云へるなり。○一首の意は、學問と云ふことは、唯物を覺ゆる事を知る爲にするものにあらず。人たる道を覺えて、君の爲民の爲に、力を盡くす材料を得んが爲にするものなり。然らざれば、學問したる功能なし。故に君と民との爲ぞと思はずば、學問も何もするには及ばずとなり。

人は生ながらにして、良知良能を備ふるものなれども、學問を以て、之を啓發せざる時は、良知良能もあらはれざるものなり。假令ば、玉の磨かざれば、光を發せざるがごとし。又性善なれども、學問を以て之を發揚せざる時は、惡と變ずる

ことあり。假令ば、鏡の研かざれば、曇るがごとし。故に、人は必學問を勉强して其の天性を失はざらんことを務むべきなり。然れども、學問は、唯博く物を知り、深く事を覺ゆるのみにては、何の詮もなし。必人の人たる道を踏み行ひ、忠孝友和信は、云ふも更なり。各其の職を務め、業を勵み、進みては公益を計り、退きては一家を整へ、貧を憐み窮を扶け、上は國家の爲に力を盡くし、下は萬民の爲に利を與へ、以て已の務を致すにあり。若し然らざれば、心神を勞し、財力を費して、學問するも、其の甲斐なかるべし。されば、學問する人は、皆此の歌に耻ぢざる樣にせざるべからず。

後白河天皇

濱千鳥ふみたく跡の積りなば甲斐ある浦にあはざらめやは

濱千鳥とは、濱に居る千鳥なり。千鳥の足跡は、文字に似たるものなれば、古より文字の事を、鳥の跡とも云へり。故に濱千鳥ふみたく跡に、多く書物を讀むことをいひかけたるなり。甲斐ある浦とは、功能のある時世と云ふに同じ。浦と云ふは、千鳥は多く海邊の浦に居る鳥なれば、千鳥の緣より云へるにて、其の意は

時世と云ふに同じことなり。○一首の意は、如何なる人にても、學問を勉强して、書物を多く讀み、知識を弘め、材藝を備ふる事の積りて、人並に勝れたらむには、假令一時は時に逢はずして、世に用ゐられざらんも、遂には學問したる丈の功能あらはれて、其の甲斐ある時世に逢はずしてあらむや。必用ゐらるゝ樣になるべしとなり。

良材は、深山幽谷に生ずとも、必工人の爲に撰出せられて、大厦高樓の梁柱となる、名玉は、瓦礫の間にありと雖も、遂には玉人の爲に發見せられて、世の重寶となる。人も亦然り。博覽多識にして、才藝人に勝れ、器量世の常ならざる人には、必聖主賢相の爲に尊ばれ、美名を千載の後に垂るゝ事なかるべからず。菅原道眞の如き、楠正成の如きは、皆是なり。されど人は如何なる人にても、必學問して、知識材藝を習ひ置かざるべからざるなり。世の諺にも、藝は身を助くとも云へり。實にさることなり。世には、淺學無識なる人にても、僥倖にあへば、高位高官に登るものもありて、一時は人に貴ばれ、世の覺もよけれど、忽にして其の器量あらはれ、遂には貧賤の身となり、思はさる恥をも受くるに至るものなり。

決して此の如き人の顰に習ふべからず。又金銀財寶は、如何に積み蓄へても、時の間の烟ともなりなむ。學問は盗賊も之を奪ふこと能はず。水火も之を攻むる事能はず。實に終身の寶なり。まして君の爲民の爲に、功をなすものなれど、必忽にすべからず。

後龜山天皇

集めては國の光となりやせむ我が窓てらすよはの螢は

よはの螢とは、夜半の螢と云ふことなれども、此處にては、學問の事によそへて宣へるなり。昔、支那の晋の代に、車胤と云ふ人ありしが、貧賤にして油を求むる事能はずして、螢を集めて學問したるより、かくは云ふなり。○一首の意は、我が書よむ窓に照らす螢を悉く集めしならは、我が日本國の光となりぬべし。恰其の螢の如く、我が日本國中の人々が、皆學問を勉強して、勝れたる人となり、同じ心に集りて、力を協せたらんには、我が日本國の光輝となり、外國々にまで耀くこととならむと宣へるなり。

學問は、萬の事物の發達進歩する根源なれど、其の消長によりては、一國の盛衰

にも關するものなり。されど、人の身に於いては、學問より大切なるものはなかるべし。西洋人の、蒸汽機關、電信機及種々の事物を發明せしも、皆學問の結果にして、所謂國の光となれるなり。故に學問は、人々各一身の爲に必要なるのみならず、君の爲民の爲になることは云ふも更なり。國の光ともなるものなれど、皆勉勵怠らずして之を習ふべし。まして、今日は世界各國と交りては、生存競爭弱肉强食の世の有樣なれど、若一歩にても彼に遲るゝ時は、忽國の衰耗を來す時世なり。我が國民たるもの、一日も忽にすべからざるなり。

儀同三司實蔭

寫しおきて神代の事も曇りなき書こそ道の鏡とは見れ

一首の意は、我が國は神の創造し給ひて、其の神の子孫が、社會を組織する事なれど、神代に於いて、神のなし行ひ給ひし事が、即人の踏み行ふべき道なり。故に神代の事を寫しおきて、今日まで殘れる神書こそ、我々の常に踏み行ふべき道を明にしるしてある鏡と見るべきなれ。書物は汗牛充棟も啻ならず、種々あれども、我が日本の道は、我が日本國の神代の事を記せる書物に悉く備れりと云ふ意なり。

中古、支那より漢學渡り來て、我が國に傳播せしかど、倫理の道は、支那より輸入したるが如く思へるものもあれど、決して然らず。我が國には、おのづから、我が國の道照々として傳はれり。其ば、古事記日本書紀等の神書に明なり。○伊邪那岐伊邪那美の二神、天神の命を受けて、國土を修理固成し給ふ時、妍哉の語あり。是に於いて夫婦の道起こる。二神天照太神、月讀尊、素盞嗚尊を生みて、各其の性質によりて、已の事業を讓りて、之を分掌せしめ給へり。是に於いて、父子の道立つ、天照大神、皇孫瓊々杵尊を降して、此の國に君臨せしめ給ふ時、親愛なる勅語を賜ひ、五部神をして之に從はしめ給ふに當りて、君臣の道確乎たり。素盞嗚尊の暴と雖も、天照大神、凌ぎ給はざるは、兄弟の道の由りて起る所なり。大國主命、少彦名命、互に同心協力して、四方を經營し給へるは、朋友の道の定まれる所以なり。已に人倫の大本たる君臣父子夫婦兄弟朋友の道、嚴として備はる。其の他の百行、推して知るべきのみ。故に、漢學の渡來するまで、幾千年を經たるかを知らずと雖も、此の大倫を攪亂したるものなし。時に一二の敗德の者なきにしもあらざれども、漢學渡來以後に比する時は、實に寥々たる晨

星の如し。若漢學渡來せずど、返りて善良なる敎化行はれしやも知るべからず。然りと雖も、漢學も亦、我が固有の大道と大差なけれど、幾分か速に文化を導き、彝倫を助けたる事なきにしもあらざるべし。其の弊害は云ふに忍びざるものありと雖も、其の主とする處は、五倫の道にあれど、敢て邪道なりとは云ふべからざるも、我が國の彝倫は、支那の輸入物なりなど思ひ僻めたらむ、大なる誤なり故に、我か國の人民は、必神書に備はる固有の大道によりて、踏み行ふべき事、正に此の歌の意の如くなるべし、西洋各國種々の敎の輸入する今日の世に於ては尤も此處に意を注ぎて、主客本末を蹈み違はざる樣にせざるべからず。

荷田東滿

踏みわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは

唐鳥の跡とは、文字を鳥の跡と云ふ所より、支那の書物を、唐鳥の跡と云へるなり。〇一首の意は、支那には、支那の道あり。我が國には、我が國の道あり。此の差別を能く踏みわけて行くべきなり。大凡、世の中の人の有樣を見るに、皆我が國の固有の道の備はれる書物は讀まずして、支那西洋の書物をのみ讀むもの多

し。是大なる誤なり。我が國に生れたるものが、我が國の書物を讀まず、我が國の道を知らずして、唯徒に支那西洋の書物をよみ、外國の道のみ知りたりとも、決して人の道にはあらずとなり。

我が國には、世界各國に比類なき特有の大道の備はれる事は、既に前に縷々述べたるが如し。而して、其の特有とする所は、君臣の大義、彜倫の大道、即忠孝友和信を基礎として、百行之に準據し、數千年來、世々美徳を濟せるもの是なり。此の如きは、獨我が國のみにして、他の外國には絶えてなし。支那の儒道の如きは、口には大義彜倫を說けども、其の實は大に反せり。所謂似て非なるものなり。其の他、諸國の稱する所は、猶大に異なる所あり。故に、我の尊き所は、倫理道德にして、外國の尊き所は學術技藝なり。倫理道德は本にして、學術技藝は末なり。本堅けれど、末弱しと雖も、其の體幹を變ずることなし。末如何に強くとも、本弱ければ、其の體幹常に定らず。是我が國體の强固なる所以にして、彼の外國の國體の脆弱なる所以なり。然るに、今世の人は、徒に彼の末技に瞑眩して、我が本根を忘れ、或は支那の書物をのみ讀み、或は西洋の學術技藝をのみ習ひて、

身は我が國に生れながら、心は支那人となり、魯西亞人となり、或は英人となり、米人となり、或は獨となり、佛となり、種々樣々に變化して、我が國は、一文の價値なきものゝ如く思ふもの甚多し。是自我が身を忘れ、我が體を放棄するものなり。人は假令不具なりと雖も、之を裝ひて、常人に劣らざらむとするが眞情なるに、然はあらずして、返りて、强壯堅固非凡なるを不具と思ひ、常人の下に立たむとす。痴愚の極とや云ふべからむ。且本を忘れ、末に走る人は、輕躁浮薄となり、利に迷ひ欲に眩みて、義理を顧みざるに至る。近世人情の澆季になれるは、實に此に基するなり。故に、我が國家を愛して、之を萬世に維持せむと欲するものは、必我が國の書をよみ、國家の成立、固有の大道を知らざるべからず。既に其の本を强固にし、而して後に、廣く外國の末技を取りて、我が短を補ふ。是ぞ眞誠の國民とは云ふべき。徒に唐鳥の跡を見るのみを、如何でか、忠君愛國なる臣民とは云はむ。

高橋連蟲麿

千萬の軍なりとも言擧せず取りてきぬべき男の子とぞ思ふ

文部省檢定濟

小學校教科用書目

伯爵副島種臣閲
伯爵東久世通禧著

書名	冊數	定價
尋常小學修身書	全四冊	定價金三十四錢
仝 教師用	全四冊	定價金八十四錢
高等小學修身書	全四冊	定價金四十錢
仝 教師用	全四冊	定價金壹圓
仝 教場用掛圖	兩面二十枚	定價金三圓
尋常修身書字解	全一冊	定價金十二錢
高等修身書字解	製本中	
尋常小學國史談	全二冊	定價金廿錢
高等小學國史	全三冊	定價金五十七錢
尋常小學讀本	全八冊	定價金六十六錢
高等小學讀本	全八冊	定價金壹圓廿九錢

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話一九四六）

國光社

社告

本紙編輯上、都合有之候間、兼題原稿は、今後發行期日十日前迄に、御送付相成度候也

明治二十八年九月五日

國光社編輯部

戰死者列傳

從軍新聞記者編纂

清國征伐の大戰爭は、古來未曾有の事件にして、忠義一途の日本男兒が、君の爲め、國の爲めに、死を決し、命をすてゝ、花々しく、戰場の露と消ゑたる、いさをしは、世界萬國の感動する處にして、百年千年の後迄も、其芳名は朽つることなし。此書は、筆を携へ軍に從ひ、身親しく千軍萬馬の間に驅逐せる、新聞記者數氏の著述にして、忠死各人の傳を盡くして、漏らすことなし。嗚呼骨を馬革に裹むは丈夫の本望、死して末代に名を留むるのみならず。此書一たび成つて、同胞の涙を灑ぐものまた益々多からむとす、泉下の英魂も冀くは瞑目するを得べし。君國を愛するの日本男兒は、一部を購はざる可らず。若夫出版方法は不日再告する所あらんとす。

東京々橋區築地二丁目十一番地

發行所　國光社

(電話番號一九四六番)

女鑑第九十二號目錄

女鑑　戰後婦人の任務に就て

論說　婦人の任務……宮地嚴夫…女子教育一班(緒言)三輪田眞佐子

史談　妓王の事……………鼴井ふく子…稻生春子傳……………永石薫風

家政　いけ花(第三)……田邊和氣子…だいごころ……………

學園　わが學園………………………………鹽井正男

漫錄　高橋獨見は諺惜まろ　故人小山田與淸●謹慎　仝●宮女の仕たき　仝●目黑の瀧　永石德文●歌會私式　なにがし●花ふゝ　鼴井雨江●可憐孃(三)中　中尾燕夢

文林　歌　高崎正風●仝　諏訪忠元●仝　小出粲●仝　遠山英一●仝●坂正臣●仝　中澤貞恒●仝　近衛光子●仝　島津輯子●仝　和所敦子●仝　諏訪晴子●仝　遠山稲子●仝　三輪貞信仝●子●仝　內田ゆか子●仝　松原ゆき子●仝　彥坂尊子●仝●納涼　三輪義方●扇　坂正臣●親しき友にわかるゝさきよめる歌●高田昌延●心さいふこさなよめる歌　海上胤平〇文　暗夜すゞみに行　林甕臣

雜報　被害地御救恤金御下賜●俘虜天恩に泣く●浩花の御注文●女子職業學校の祝宴●貴夫人の美擧●軍人慰勞會●募集金決算の報告●奇特細民救濟會●隻脚兵士の祝宴●女子高等師範學校新入學論(東京經濟雜誌所載)●地理知らぬ旅人●受賞者●臺灣の願員婦人の率先者●評願出詠の君たちに

鍋島侯爵夫人染筆色紙形

敎の庭　歌文數十首

附錄　避暑の栞(承前)　修身百首(つゝき)

口繪……………永峯秀湖……………挿畫……………高橋松亭

(明治二十四年八月八日內務省許可　明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十八年九月四日印刷

同　年九月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行兼印刷人　川崎直衞

同　編輯人　山根勇藏

同　發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)